彦根城博物館所蔵『今昔物語』巻二十の本文の位置づけ

中根千絵

はじめに

論者は、『説林』五三号において、彦根城博物館所蔵『今昔物語』（全巻、表紙の題は『今昔物語』と書いてあるが、内題には『今昔物語集』とある。）の紹介を行ったが、その際、本の空白部分の分析、流布本系共通脱文の分析から、彦根城博物館所蔵『今昔物語』は、内閣文庫本Ｂに近い流布本系の本であり、内閣文庫本Ｂより良い本であろうと論じた。[1] しかし、その位置づけが正しいかどうかは、諸本との一語一語の比較を経て、初めて、立証されるものである。巻一については、先に論集で分析を行い、彦根城博物館本は内閣文庫本Ｂとのみ一致する箇所が多く、これは、『説林』五三号で論じたのと同じ傾向であるが、旧日本古典文学大系の底本である東大本甲や東北大本、野村本とのみ一致する箇所もあり、彦根城博物館所蔵『今昔物語』は、流布本系諸本（内閣文庫本ＡＢＣ、東大本乙）と古本系諸本（東大本甲、東北大本、野村本）の間の状態を有する希有な本であるということを述べた。[2] 巻二、巻五、巻七、巻九の場合は、鈴鹿本という原本に近い本が残っているせいか、古態を残すとされる東大本甲、東北大本、野村本と一致する箇所は非常に少ないという結果が得られた。[3] 但し、巻五、巻七では全体として、流布本系の諸本と表記が一致するにも関わらず、固有名詞等については、古本系諸本に依っており、これは巻四と同じである。[4] 巻三・巻六・巻十では、特に、野村本が流布本系と古本系との狭間で揺れている様を見てとることができた。また、様々な要件から、流布本系は、校訂

本文を目指した書物群ではなかったかと推測した。但し、彦根本のように、中間的な表記を有する書物の場合には、いまだ、そのどちらとも見定めがたいとし、今後、さらに、巻ごとの分析を続け、彦根本の性格を見極めると共に、古態本と流布本の総合的な分析を行っていきたいとした。(5) 巻四の場合に顕著な傾向として現れるのは、古本系との一致度が高く、内閣文庫本Bとの一致度は低いということである。これまで、彦根城博物館本は古態本と流布本の中間的な本として位置づけてきたが、巻四にいたって、古態本の表記を有することが判明したことにより、改めて、彦根本の位置づけを考えてみなければならないこととなった。(6) また、巻十一・巻十二では内閣文庫本Bにおいて、出典等による補入がある部分については、その表現は一致しない。こうしたことから、彦根城博物館本は、内閣文庫本Bより前に成立した写本である可能性が高いと考えた。(7) 巻十二の分析においては。さらに、内閣文庫本B、Cおよび野村本は校訂本文を目指した書物であることを明らかとした。また、巻十二においては、彦根城博物館本のみが最も古い鈴鹿本の表記の一部を残していることも指摘した。(8) 巻十三では、古態を残すとされる東大本甲、東北大本、実践女子大本、國學院大本と一致する箇所は多くないという結果が得られた一方、B本のみと重なる箇所も見られなかった。代わりに、東大本乙が古本系と表現が一致する場合、流布本系と表現が一致する場合の両方において、彦根本と一致する箇所が多いことが認められた。両本の表現の全てが一致するというわけではないので、直接の書承関係があるとはいえないものの、彦根本が乙本と同系統の本文を引き写した可能性、あるいは、その逆の可能性を指摘した。また、固有名詞について、底本である東大本甲では、「欠験記ニ依テ補フ」という朱傍があり、古本系とされる実践女子大本、國學院大本は、同じ固有名詞を記しているが、流布本系の乙本、A本、B本、C本、また、彦根本も、欠を補わず、□としている。このことから、古本系においても校訂がなされないわけではないことが明らかとなった。(9) 巻十四においても古本系とされる実践女子大本、國學院大本、野村本が校訂本文を目指した本であることを指摘した。(10) 巻十五の本文の異同からは、彦根城博物館本が古態本と流布本の両本の系統を見ることができる環境にあったと仮定し、古語としての漢字の表記には忠実でありながらも、順序の入れ替えのような明らかな誤謬については、訂正するという意識が垣間見られることを指摘した。(11)

巻十六では、彦根城博物館本はB本と乙本のいずれかの表記にほぼ合致し、古態本系の欠字部分のほとんどが流布本系では踏襲されず、欠字をなくして、意味合いが通じるような表現に変更されている様が見てとれた。[12]

巻十七では、彦根城博物館本の表記が底本や古態本系と同じ表記のところで、内閣文庫本Bが写し間違って異なった表記になっている例がしばしば見られ、内閣文庫本Bが彦根城博物館本を写して出来上がった本であることが明らかとなった。[13] 以前に、巻十五では、彦根城博物館本が古態本と流布本の両本の系統を見ることができる環境にあったと仮定し、古語としての漢字の表記には忠実でありながらも、順序の入れ替えのような明らかな誤謬については、訂正するという意識があったと考察し、[14] 巻十六の場合には、流布本との一致度の高さからみて、流布本しか見ていない可能性も考え得るとして、[15] 巻ごとに見ている本が異なるかのような論述を行ってきたが、巻十七においては、鈴鹿本（京都大学蔵本）という原本に近い本が残っていることから、これまでの一見、矛盾するかのような現象の謎を解く例証が見つかり、古態本系と流布本系の書写関係の中で彦根博物館本がどこに位置するかを見出すことができた。これまで、彦根城博物館本は古態本系と流布本系の間にある本と考えてきたが、巻十七の表記の諸本の違いを見ると、それは、彦根城博物館本が古態本系統の本を引き写しながらも、自らの校訂の方針によって変更を加えた結果、流布本の性格と近しいものとなったように思われる。また、底本の字を読み間違った箇所の表記について、諸本を総合的に分析すると、次のようなことがいえるように思われる。それは、実践女子大本と國學院本の系統の古態本から、その表記は彦根城博物館本に継承され、その後、彦根城博物館本から内閣文庫本Bへ、別系統の古態本（東大本甲に近い本）を引き写した東大本乙から内閣文庫本ACの系統へと書写されていったということである。書写の過程で、写し間違いや校訂があり、それによって、古態本と流布本の表記が時折、交錯するようにみえることはあるものの、基本的には諸本の書写の過程は、右のようなものであったと推測される。巻十三の分析時に実践女子大本と國學院本のような古態本も校訂しているのではないかということを指摘したが、[16] ここでそのことがより明確となった。

巻十九で明らかになったのは、古態本における捨て仮名や送り仮名などが流布本では落とされ縮められてすっきりし

た形に変化する傾向にあり、それが流布本系と古態本系の表現を分けるメルクマールになっているということである。[17]

巻二十についても引き続き、彦根城博物館所蔵『今昔物語』の本文を他の諸本と比較することにより、彦根博物館所蔵『今昔物語』巻二十の位置づけを試みることにしたい。但し、諸本の収集は、いまだ、その途上にあり、旧日本古典文学大系『今昔物語集』の校異と頭注から必要な部分を抜き出す形で、諸本との比較を行うこととする。

凡例

一番上の段は旧日本古典文学大系のページと行、次の段は彦根城博物館所蔵本の本文、次の段は彦根城博物館所蔵本と同じ本文を持つ本の種類である。（但し、異体字などの字形が異なるものについてはこれに含め、その都度指摘した。）

★印は彦根城博物館所蔵本独自の部分であり、その部分については諸本の例を示した。旧日本古典文学大系に載る考察は必要に応じて「」に入れて付した。

各本の略語は次の通りである。

底―旧日本古典文学大系『今昔物語集』の底本（実践女子大本）【旧日本古典文学大系『今昔物語集』の底本が現在の諸本のうちの古態本にあたると考えられることから、底の字を使うことで、それが一見して明らかとなるようにした。】

北―東北大本　実―実践女子大本　国―國學院大本　野―野村本　以上、古本　乙―東大本乙　A―内閣文庫本A　B―内閣文庫本B　C―内閣文庫本C　以上流布本　彦―彦根城博物館所蔵本

大―旧日本古典文学大系

巻二十目録

一四三　第二（第二）　乙ABC

餘慶（第八）	諸	（底国の慶は変　广＋心＋夂に作る）
野于（第十四）	乙ＡＣ	（乙Ａの于は丁）
従冥途還（第十五）	底国乙Ｂ	
恵睞（第二十）	底国乙Ｂ	（睞を国Ｂは日偏、乙は目偏に作る）
大伴赤麿（第二一）	乙ＡＢＣ	
馬逞山寺（第二四）	諸	（乙Ａの庭は異体、底国Ｂはその変に作る）
盛現報（第二五）	乙ＡＢ	
白髪邦猪麿（第二六	Ｂ	
吉志火麿（第三三）	ＡＢＣ	
心懐（第三五）	諸	（底国の懐は変　旁を袁に作る）
被敢悔語（第三七）	ＡＣ	
可慎（第四三）	諸	（底国の慎は変　旁は貞に近し）
小野篁依情助西三条	諸	（底国の篁は変　篁の皇を黒の草体　西を両に作る
大臣（第四五）	諸は條	

巻二十第一話

一四四	3	天狗	乙ＢＣ
	6	何テカ	乙ＡＢＣ「何ナカ」底国大
	9	同シ様ニ	諸（底のシは変　冫に近し）
	10	河尻ニ	「河尻ニ」乙ＡＢ「河尻ウ」底国（ウに「亻无」（右）「ニ」（左）と傍書）「河尾ニ」

14　不寄シテ　C
乙ＡＢＣ

14　怖ル、事　乙ＡＣ「怖ル事」Ｂ「肺ル、事」底国大
「流布本の「怖」が原姿か。」

15　暫許有テハ中ニ　乙ＡＢＣ「暫許有テハ□中ニ」底国大

15　芍ナル　Ａ「芴ナル」Ｂ「若ナル」Ｃ「劣ナル」底国乙大

15　天童ノ　乙ＡＢＣ「天等ノ」底国大
「古本かく作る。正字は流布本の「天童」。」

16　比叡山学問スル　乙ＡＢＣ

一四五4　弟子トシテ　乙ＡＢＣ

5　語リ傳ヘタルトヤ　乙ＡＢＣ

巻二十第二話

一四五9　天狗　乙ＡＢＣ（Ａの狗は犾）「天宮」底国大

10　徳行ノ僧共　乙ＡＢＣ

11　聞クニ　乙ＡＢＣ「聞クハ」底国大
「古本かく作る。聞く上は、もしくは聞く時は、の意。」

11　一度カ競セムト　乙ＡＢ（Ａのムはン）

14　比叡山ノ嶽ノ　乙ＡＢＣ

15　此天狗ニ　乙ＢＣ

16	此ノ天狗	B
16	震旦ノ天狗ニ	乙BC
16	知タル身	諸大
一四六4	拨セント	諸
6	尋ヌレハ	乙ABC
7	何ト此ニハ	乙ABC「何ド此ハ」底国大
9	者ノ躰	乙ABC
10	有ヌレト	乙ABC「有メレト」底国大　その人であるようだと。
13	幣（ツタナシ）	乙AB
13	最	ABC
14	許ニ居ヌ	乙AC
15	下ル	諸
16	□タル	諸大
17	前ニ追ヒ立テ	乙ABC「前〻追ヒ立テ」底国（〻の左下傍に二〻右下傍に追ヒと補入）「前〻ニ追ヒ立テ」大
17	□テ	諸大
一四七1	過ヌ	底乙AC（底のヌはメに近し）
2	耻シメ云ヘハ	乙ABC
3	非ヌ氣色ナレハ	底国乙
3	被捕テ	乙B

4　急キ迯ヌル也　乙ＡＣ（乙の也はナリ）
4　羽ノ疾サハ　乙「羽ノ疾サニ」ＡＣ「双ノ疾サハ」Ｂ「明ノ疾セハ」底国（底はセにサと重書して訂）「明ノ疾サハ」大
「流布本・真言伝の「羽」を以て原姿と想定するならば、字類抄によってカケリともよみ得る。」
5　思ヘテ　乙ＡＢＣ「思ヒテ」底国大（底はヒにエ松と朱傍）
6　返ラムハ　乙ＡＢＣ（ＡＣのムはン）「返ナムハ」底国大
8　人掃フ渡ル　乙ＡＢＣ「人掃ヲ渡ル」底国大
10　取懸ヌラムト　乙ＡＢＣ（ＡＣのムはン）「取懸ヌラムヤト」底国大（底はヤにカ松と朱傍）
12　由無キ者　乙ＡＢＣ（乙ＡＢＣは无）「由无ユ者」底国大
12　伺フ事有ソ　乙Ｃ「伺フ事有リ」Ａ「伺ノ事有リ」Ｂ「伺フ事有ヲ」底国大
12　□テ　諸大
13　弘コリ立テ　ＡＢ「弘ヨリ立テ」乙「弘マリ立テ」底国Ｃ大
13　谷下　乙ＡＢＣ
15　居ソ　諸大
17　伢レ臥セリ　乙ＡＢＣ「伢シ臥セリ」底国大
一四八1　本者無シ　乙ＡＢＣ（乙ＡＢＣは无）
2　云テ打ツ咎フル様　乙ＡＢＣ
4　其ヲ　乙
4　焼ケヌヘカリツレハ　乙Ｂ「焼ヌヘカリツレハ」ＡＣ「焼ケヌベカルツレバ」底国大

5	持チ副テ	乙BC
6	真言ヲモ	乙ABC「真言モ」底国大
7	猛ク怖シキ事	底国乙B
7	無クテ	乙ABC（乙ABCは无）「无ク」底国大
8	悲キ目	ABC
8	見給フル也ト	乙ABC
9	非サリ	乙ABC「非ザナリ」底国大
11	谷ノ底ヨリ	ABC（Bの底は変）「谷底ヨリ」乙「谷ノ庇ヨリ」底国大
12	穴カナ給ヘ	諸
14	泣テ居リヌ	乙B
15	其此ク	乙B
16	将行キナム	乙AB（Aのムはン）
16	茄喻シテ	乙AB
一四九1	木ヲ	乙ABC
2	渡サセテ	乙AC
2	何ノ人ノ	乙ABC
4	語ケル	乙ABC
4	傳ヘ聞テソ	乙ABC
6	語リ傳ヘタルトヤ	乙B

巻二十第三話

一四九10　道祖神在マス　乙ＡＢＣ
12　歩人ハ　乙ＡＢＣ
14　云人　乙Ｂ
15　天狗ナトノ　諸（底のナは変　ケに近し）
16　日ノ装束　乙ＡＢＣ（乙Ｃの装は裝）
17　詣集レル　乙ＡＢＣ（Ｂの詣は変）
17　拂ヒ去サセテ　乙ＡＢＣ
一五〇1　光ヲ放テ　乙ＡＢＣ
3　而ルニ　乙ＡＢＣ大「而ニル」底国「古本「而ニル」に作るを、訂。」
3　怖ク思ヘ給ヒケレハ　ＡＢＣ
4　侘テ　「佗テ」古本大　正字は「侘」。
4　□メク　諸大
6　現シ可給キソ　乙ＡＢＣ
8　申シケリ　諸大　諸本かく作る。
8　人カナト　乙ＡＢＣ

巻二十第四話

一五〇13　就中　乙ＡＢＣ

16　有ケリ　　乙ＡＢＣ「有ナリ」底国大
16　留メ　　乙ＡＢＣ
16　鳥ヲ　　諸「鳥リ」底大

一五一
1　其ノ参ル間　　乙Ｂ
2　無カリケリ　　乙ＡＢＣ（乙ＡＢＣは无）「无カナリケリ」底国大
4　五壇ノ　　底国ＡＣ
4　御修法　　乙ＡＢＣ
6　奇異ヒ合テ　　乙ＡＢＣ（Ｂのテは変）「寄異ト思ヒ合テ」底国大
7　心ヲ至シテ　　乙ＡＢＣ「心ノ至シテ」底国大
「古本かく作る。このノは、ヲの意。」
8　不御サルニ　　乙Ｂ
8　辟ヒ　　「譬ヒ」底乙ＡＣ（乙は異体、底はその変　言を呈に作る）
9　程有テカリ　　乙「程有テカク」ＡＢＣ「程有テカソ」底国大（カにコ歟と朱傍）
10　加持参ル次テ　　乙Ｂ
11　居タル所ニ　　乙ＡＢＣ
12　思ヒ合ヘリケル　　ＡＢＣ
13　猶ノ　　Ｂ
13　何ナル事ソト　　乙ＡＢＣ「何ナル事ヲト」底国大
14　心ヲ勵マシ　　乙ＡＢＣ「心ヲ殿マシ」底国大
「古本かく作るは、「殿」の異体に牽引同化されたもの。」

16　投チ被伏ヌ　　ＡＢ
16　打チ被責テ　　乙ＡＢＣ
一五二1　一切人ニ　　乙ＡＣ「一功人ニ」Ｂ「一切レ人ニ」底国大
5　且ハ憚ケリ　　乙ＡＢ（Ａの憚は変）
6　喩〆奉タリシ程ニ　　乙ＡＢ（乙ＡＢはシテ）
6　佛ノ如クニ　　乙ＡＢＣ「佛ノ如ク」底国大
7　此様ノ者ノ　　乙ＡＢＣ
7　遂フトモ　　乙ＡＢＣ
8　貴ヒケリ　　乙ＡＢＣ
9　知人無シ　　乙ＡＢＣ（乙ＡＢＣは无）「智人无シ」底国大
9　彼高山ニ　　乙ＡＢＣ
9　有ナリト　　乙ＡＢＣ

巻二十第五話

一五二17　只獨リ佛前ニ　　乙ＡＢＣ「只獨ノ佛前ニ」底国大
「古本かく作るが、或は、「仏ノ」を顚倒したものか。」
一五三1　僧ハ　　乙ＡＢＣ
1　僧〔　脱　〕ハ　　「僧〔正、「夜〕ハ」大　流布本脱。
1　急入リ来ニ　　乙Ｂ
3　不堪（タヘ）〆　　乙ＡＢＣ（乙ＡＢＣはシテ）

4　落ニケレハ　乙ABC
4　寄テ　乙ABC
4　引ヒロヒテ　乙ABC
4　奪ヒ取テケル尼　乙B「奪ヒ取テケル尼ハ」AC「奪ヒ取テケルニ尼」底国大
5　取テ逃ケ去ニケリ　ABC
6　今有リ其尼ヲ　乙ABC
6　天狗ト　乙BC
6　云也トナム　ABC
6　語傳ヘタルトヤ　B

巻二十第六話

一五三10　其　乙ABC
12　冊許　B
13　持来テ云フ様　乙ABC
14　産メテ　B「痊」諸「諸本かく作るが、この字は「瘦」の意で、この文脈には合わない。恐らく「疘」の譌で「ヨソハシメテ」とよむべきものであろう。」
14　仕テムナト叉　★「仕テムナム事」諸（ACのムはン、底国Bはナムの左下にト歟と傍書）「諸本かく作るが、原姿は「仕テムナムド」か。」
15　何ソノ奴ノ　乙ABC
15　恠テ　諸大

16　可然キ　　乙ＡＢＣ「可亦キ」底国大（亦は異体）

「古本かく作るは、「尓」の譌か、或は「然」の「犬」を省いたものか。」

一五四

1　爪挑ナト　　Ｂ

3　不見ハト　　乙Ｂ

4　候ニケリ　　諸大

4　可申事候ヘリ　　乙ＡＢＣ

6　何事ニカ有ラム思テ　　乙Ｂ

6　忍給ヘツル　　乙ＡＢＣ

8　侘テ　　「佗テ」古本Ｃ大

8　此ナセソ　　乙ＡＣ

9　逃ナム為ルナメリ　　乙ＡＢＣ（ＡＣのムはン）

11　不量シ外ニ　　乙ＡＢＣ

12　擬テ　　諸大「諸本かく作るが、「攤」の譌であろう。」

12　女ニ間許　　乙ＡＢＣ（ＡＣの許はは計、Ｂのニは変）

13　三ノ肬ヲ　　乙ＡＢＣ

14　如クシテ　　乙ＡＢＣ

14　佛ノ御前ニ　　乙ＡＢＣ（Ｂの御は変）

14　四度許　　乙ＢＣ

16　其ノ時　　Ｂ

17　事ニ非ス　　乙ＡＢＣ

一五五 1 御行ヒ緩ニ　乙ABC「御ヒノ緩ニ」国「御ヒノ緩ミ」底大
1 聞ツルハ　諸大
2 詫　乙ABC「託」C「詫」古本大
「古本かく作るは、「託」の増画「詫」の譌。」
2 被搦レ奉タレハ　乙ABC（Bのタは変）
4 泣々ク　乙B「泣々」AC「泣クゝ」底国大
4 其時　乙ABC
5 心醒テ　乙AC（乙の醒の旁は皇）
5 去ニケリ　乙ABC

巻二十第七話

一五五 11 開白ノ　底国
12 微妙ナリケリ　乙ABC
15 鉢ヲ　諸（底国の鉢は変　食偏に作る）
16 高成ニケリ　乙ABC
16 御悩ヲ令祈ナムト　乙ABC
17 辞シ申スト　ABC
一五六 1 遂ニ参ヌ　諸（底国の又は変　メに近し）
1 参ルニ　乙B「参スルニ」A「参ラスルニ」C「参□ルニ」底国大
2 詫テ　「詫」乙A「詐」B「詫」大

「正字は、C本の「託」。」

6　御草衣許ヲ　B「御単衣許ヲ」乙AC（Aの許は計）「御嘗衣許ヲ」底国大

6　髴ニ　乙ABC

7　見不習ヌ　乙AC

7　此ク　諸大「此」AC

9　思ヒ過クヘクモ　B

12　騒キ喧ル　乙BC

12　療治セムカ為ニ　乙ABC（Bのムはン）

13　殿上ノ方ニヘ俄ニ　乙AB

16　陸ヒムト　底国乙大「眤ヒント」AC「睦ヒムト」B　「正字はB。」

一五七1　馴（ナレ）近付キ奉ルヘキ　ヲ乙ABC（乙ABCは事）

1　三寶ノ　諸「三宝ヲ」C「三寶ノ」大　「ノは、ヲの意。」

2　鬼ニ　諸大

3　餓レ死ニケリ　乙B

4　膚（ハタヘ）黒キ　乙ABC（乙ABCは事）

4　錠ヲ入タルカ　諸（底Cの旁は冠＋之）

5　人々現ハニ此ヲ見テ　B

7　不見ヌ　乙AB

8　懐テ狂ハシ　AB「懐テ狂ハレ」C「懐テ狂シ」乙（懐は変）「悦ラシ狂ハシ」底国大

「流布本、この語を理解する能わず、「懐テ」に作る。」

9　女房ナト聞ケレハ　大「女房ナト聞ツレハ」乙ＡＢＣ「女房ナト□ケレハ」底国（空白は行末　トの左下にハと補入し、みせけちして聞を傍書　レにルィと傍書）

10　后モ咲嘲ラセ給ヒケリ諸（底国はリみせけちしてレハと傍書）

11　忿参タレハ　「忿参タレハ」乙ＡＢＣ（乙の忿は急、Ｂは変）「忿参タレド」底国

11　例違フ夏　ＡＢＣ（ＡＢＣは事）

12　居サム給タルケル　Ｂ

12　御眼見ソ　乙ＡＢＣ

12　怖シ氣ナル　諸

13　歎カセ給フ　諸（底の給は変　三水に作る）

14　同シ様ニ　底国

14　媚キ者思食タリケリ　底国

16　恐チ　乙ＡＢＣ

17　幾ク程ヲ　国乙ＡＢ「幾ノ程ヲ」底「幾程」Ｃ

一五八

1　極フ　乙ＡＣ

1　此鬼降伏セム　乙ＡＢＣ（ＡＣのムはン）

2　験ニ　乙ＡＢ「験ニヤ」底国Ｃ大

3　見奉ラムトテ　乙ＡＢＣ「見奉ラムヒテ」底国大

「流布本が原姿であろう。」

4　御幸也トテ　乙ＡＢＣ「御行也」底国大

「上の「行幸」と故らに字面を変えたもの。」

6　而ル程ニ　　乙ＡＢＣ「而ル程間」底国大
「「而ル程」と「而ル間」との混淆であろう。」
6　俄ニ角ヨリ踊出テ　　乙ＡＢＣ
7　例ノ有様ニテ　　乙ＡＢＣ
7　躍出ヌ　　乙ＡＢＣ
9　超ニケレハ　　ＡＢＣ
11　止事無カム　　乙Ｂ（乙Ｂは无）「止事无カラン」ＡＣ「止事无ナカム」底国大
「原姿がナカラムならば「无」の全訓すてがなになるが或はカ→ナ、ラ→カと二重の変化を受けたものか。」
11　如然シ有ラハ法師ヲハ　乙ＡＢＣ「如然シ有ラム法師ノ」底国大
「終止形による連用法と見るべきであろう。」
12　憚リ有ル事　　乙Ｂ
12　語リ傳ヘタルトヤ　　乙ＡＣ「語リ傳リ傳ヘタルトヤ」Ｂ（衍字「傳」あり）「語ト傳ルトヤ」底国大「古本かく作るは、「語リ」の譌か。」

十行空白

一五八16　良源僧正成霊来観音院伏餘慶僧正語第八　　大

標目の後〔　脱　〕　諸大欠

標目の後十一行と
半枚空白

巻二十第九話

一五九　5　若キ男　　乙ＡＣ「若テ男」Ｂ「若キ男ヲ」底国大
「古本かく作るは、「男」の全訓すてがなか。或は「コ」の譌か。」

5　極クマレク　　乙ＡＢ「極クマレリ」Ｃ「極ク□マレク」底国大（空白は行末　後のクの左傍にニィと傍書）
「古本、茲で行変りになるが、何か形容詞の語幹が有ったものであろう。」

6　傳フル事モ　　Ｂ

7　堅固ニ精進ヲ　　諸（乙の堅は賢）

9　男　　諸

12　刀ヲ　　乙ＡＢＣ

14　況ヤ　　乙ＡＢＣ大「況ヤヲ」底国（ヤの左側にヲあり）

15　若シ刀不差シテ　　乙ＡＢＣ（Ｂの刀はカ）

15　怖キ事モ有ラハ　　Ｂ「怪キ事モ有ラハ」ＡＣ「恠キ事モ有ハ」乙「恠シキ事有ラバ」底国大
「蓋」「古本かく作るは、「蓋」と「益」との混淆か。音・形相近いので、このような字体が生れたものであろう。」

15　益

16　思ヒ得テ　乙ＡＢＣ「思ヒ得キ」底国大　「終止形による中止法か。」

16　鐃テケリ　底国Ｂ大「鋭テケリ」乙「競テケリ」ＡＣ

一六〇　1　尚　乙ＡＢＣ

2　不思ヘ　乙ＡＢＣ

2　遙々ト　乙ＡＢＣ

4　□来ヌルカナト　諸大

5　啀キテ　諸（咳は変　旁を宛に作る）

5　宥ナフメレハ　★「宥ナフヌレハ」乙ＡＢＣ（ＡＢＣの宥は変　ウ冠＋百に作る）「音ナフスレハ」（音は変　第一画を欠く）「音ナフヌレバ」底（音は変　第一画を欠く）「音ナフメレハ」大

本ノマニ　底国乙

6　瞳長ナル　乙ＡＢＣ（Ａのリは変）「不見エザリケルゾト」底国大

6　不見リツルソト　諸（底のツはフに重書して訂せしものの如し、ＡＣのムはン）

8　云ツラムト　乙ＡＢＣ

8　出テ　ＡＢ

9　莚ノ上ニ　乙ＡＢＣ

10　不差ル　乙ＡＢＣ

12　刀差タルト　乙ＡＢＣ「刀ヲ差タルト」国「刀ナ差タルト」底

13　捜出（サクリ）サムトス　「ナは「刀」の捨てがな。」

Ｂ

13　淀ニ成ナム

★「徒ニ成ナム」乙ＡＢＣ（乙Ｂの徒は変　三水に作る、ＡＣのムはン）「徒ニ成ナムズ」底国大

13　円死ニヲ　乙Ｂ

14　抜キ儲テ　乙ＡＢＣ（Ｂの抜は変）

16　何クトモ　諸（乙のトモは共）

16　大キナル　乙ＡＢＣ

17　泣キ迷フ　ＡＢ「泣キ迷」乙「泣々迷フ」Ｃ「泣キ逆フ」底国大

一六一　1　来ヌルト思ヒツレトモ　乙Ａ（乙のトモは共）

1　洞院ト　乙ＡＢＣ

1　云寺　乙ＡＢＣ

2　□男　諸大

3　更ニ不死〆　乙ＡＢＣ（乙ＡＢＣはシテ）

5　聊モ　乙ＡＢ

5　無カレトナム　乙ＡＢＣ（ＡＣのムはン、乙ＡＢＣは无）

5　人狗ト　諸大

6　人ニ非ス者也　乙ＡＢＣ

巻二十第十話

一六一　11　□ト云　諸大

11　宿ス　乙ＡＣ

13　旅宿ニ〆　　諸（彦底国の旅は変　旁を裴の如く作る）
14　□タリ　　諸大
15　頭姿　　乙ＡＢＣ
15　細ヤカニ〆　　乙ＡＢＣ（乙ＡＢＣはシテ）
15　弊レト　　乙ＡＢＣ

一六二

1　ウシロメタナキ　　乙ＡＢＣ
1　倦ハムカ　　乙ＡＢＣ（ＡＣのムはン）
3　口覆ヒシテ　　乙ＡＢＣ「口覆ヒシウ」底国大
5　衣ヲ脱弃テ　　乙Ｂ（Ｂのヲは変）
6　辞一夏　　Ｂ（Ｂは事）
6　開ヲ　　乙ＡＢＣ
7　失ニケリ　　乙ＢＣ
8　預咲タリ　　Ｂ
9　恠ク思ケレハ　　ＡＢＣ
12　亦□也　　諸大
12　其レモ亦　　乙Ｂ
14　夜曙ヌレハ　　乙
15　不心得恠シキ　　乙ＡＢＣ
15　方ツ忌テ　　乙ＡＢＣ
15　夜明ルマヽニ　　乙ＡＢＣ

16	物ニ取テ	ABC
17	郎ホノ郡司ノ	乙ABC（乙ABCは等）
一六三1	候ヒツレトモ	乙AB
2	取ヌレハ	乙AC
2	何ソ思テ	乙ABC
5	皆失ヌ	国ABC
6	有テ	諸大
7	宿ス	乙AB
9	何ナル事ヲ	乙ABC
10	物ヲ多ク	乙AC
10	云	流布本「云フ」大
11	年老タリシヲ	乙ABC
12	侍テ也	ABC
13	熊下給キ	乙AB
16	浄マハリ	乙ABC（Bのマハリは変）
17	浄マハル	乙ABC
17	満ツ日	諸「諸本かく作る。終止形の連体法と見る。」
一六四2	立タリ	ABC
3	鬼ニマレ神ニマレ	国乙AC
5	水増ヌ	底国A

5　一抱許　　諸（底国の抱は変　把に近し）
6　縁責（ロク）　　B
6　ツヤメキニ見ユ　　乙A
7　極テ怖シクテ　　乙AB
7　暫有テ　　乙AC
8　思ヘツレトモ　　諸大　諸本かく作る。「極テ怖シク思エツレバ」の意。
8　不抱サリツハ　　乙B「不抱ザリツハト」諸大
9　然ルニテ　　乙ABC
9　試ムト　　国ABC
9　云テ　　諸大
11　イカラカシテ　　底国乙
12　不抱リケムト　　乙ABC（ACのムはン）
13　習ヒ不得給ハ　　乙ABC
17　古藁ノ沓ヲ　　乙AB

一六五
1　間　　乙ABC
2　供奉ヲ　　乙AC
2　為サセ給ヒニケリ　　乙ABC（Bのニは変）
3　御身ニテ　　底国乙大「御身マテ」AC「御身シテ」B
4　下臈ノ　　乙ABC「下髄ノ」底国大
「古本かく作るが、流布本の方が原姿であろう。」

6　有ヌレ　　乙ＡＢＣ
6　難受シ　　諸（底の難は変　左旁を革に作る）
7　適ニ　　乙ＡＢＣ
8　出テ　　乙ＡＢＣ
8　語リ傳ヘタルトヤ　　乙ＡＢＣ

巻二十第十一話

一六五12　□郡ニ　　諸大
13　哀レカリ　　乙ＡＢＣ「哀ツレカ」底国大（底の哀は変　口を日に作る）「古本かく作るは「哀ツルガ」もしくは「哀バンガ」の譌か。」
13　見ヘケル　　ＡＢＣ
14　檀トシテ　　乙ＡＢ「壇トシテ」Ｃ「栖トシテゾ」底国大（底の栖は変　旁を一＋曲に作る）
17　此ノ　　諸大
17　鵄　　乙ＡＢＣ「□鵄」底国大
17　龍カ強キ　　乙ＡＢＣ
一六六2　抓ミ砕ト散ム　　乙ＡＢ（Ａのムはン）「抓ミ砕ント教ン」Ｃ「抓ミ砕□散ム」国「抓ミ砕キ散ム」底大（キは古体）
「「噉」の省文「敢」の譌か。然らば、よみは、クラハムもしくはダンゼム。」
2　遙ニ　　乙ＡＢＣ「潦ヲ遙ニ」国「潦テ遙ニ」底大（底国の遙は変　畜を奚に作る）
「「繚」の譌。流布本、此の語を脱す。」

3　狭キ洞ノ　乙ＡＢＣ（狭は変　旁を乙は吏、ＡＣは交、Ｂは挍に作る）「狭キ峒ノ」底国大
3　□破　諸大
3　一滴　乙ＡＢＣ（乙Ａの滴は変　旁は商）
3　空ヲ　諸（底のヲは変　ウに近し）
4　亦　諸大「諸本かく作るが、「只」の譌であろう。」
5　東塔ノ　乙ＡＢＣ
6　縁ニ出テ　乙ＡＢＣ「挺ニ出ニ」底国大「延」の増画。
7　将キ行テ　乙ＡＢＣ
8　今ハ限リト　Ｂ「今ハ限ト」乙ＡＣ「今ハ限タト」底国大「「限ゾ」の譌であろう。」
10　立有テ　乙ＡＢＣ
11　洗ハム為ニ　乙ＡＢＣ（ＡＣのムはン）
11　縁ニ　乙ＡＢＣ
13　□テ　諸大
14　水瓶ニ　諸（底の瓶は変　并の廾を甘に作る）
15　互ニ　乙ＡＢＣ（乙は異体）
16　助ク事ヲ　諸「助事ヲ」乙「終止形による連体法の例。」
16　本ノ栖ニ　乙ＡＢＣ（乙Ｃの栖は手偏）
一六七
2　僧負テ　乙ＡＢＣ
2　蹴破テ　諸（底の蹴は変　旁を龍に作る）

2　雷電霹靂〆　「雷電霹靂シテ」諸（底の電は変　雨冠＋黽、乙ＡＢの靂霹は穴冠）
4　須更ニ　底Ｂ
4　坊ニ至ル　乙ＡＢＣ
4　去　乙ＡＢＣ
5　常ノ霹靂シテ　乙ＡＢＣ（Ａの霹は穴冠、Ｂのシは変）
5　房ニ落懸ト思フ程ニ　乙ＡＢＣ「房ニ懸ト思程ニ」底国大
5　有タン暗タルニ　★「有タニ暗タルニ」Ｂ「有タルニ時タルニ」ＡＣ「有タルニ晴タルニ」乙「有テ晴タルニ」底国大
6　失ニシ　乙ＡＢＣ（Ｂのシは変）
6　坊ノ人ニ　ＡＢＣ
6　人皆聞テ　ＡＢＣ
7　驚キ奇異カリケル　ＡＢＣ
9　翼折レタル　諸（底の翼は変　习を己に作る）

巻二十第十二話
一六七16　聖有リ　乙ＡＢＣ
17　唱リ外ノ事　Ｂ
17　三修禅師ト云ケル　乙ＡＢＣ（ＡＣ以外の修は異体）「三修禅師トゾ云ケリ」底国大
一六八8　眉間ハ　乙ＡＢＣ
10　佛ノ　諸大

13　西ニ　諸大
16　其坊ノ　乙ABC「其防ノ」底国大「正字は「坊」。」
17　法師　乙ABC
一六九2　御覧スルソト　乙ABC
4　ヲウ〳〵トソ　底国
4　叫レケル　乙ABC
6　此ク　乙B
8　不似サリケル事ノ　乙B

巻二十第十三話

一六九12　被謀野猪語　乙ABC
13　持来テ　乙ABC
14　不労ケリ　乙ABC
16　常ニ　乙ABC大「掌ニ」底国
「古本「掌」に作れるを、流布本により訂。」
16　可然物ナトヲ　乙ABC
17　久ク此聖人ノ　乙ABC
17　餌袋（ヱ）　乙ABC
一七〇1　不審ナ事共ナト　乙AB
4　問テ云　諸

5　汝モヤ　乙AC
5　見奉メリト咎　乙ABC
5　猟師思ハク　乙ABC
6　聖人ノ　乙ABC
7　タヨリ今ヤヤト　乙ABC「今ヤ〳〵ト」底国大
7　東ノ峯ノ　★「東峯ノ」底国大「東ノ方ノ」乙ABC
8　此坊ノ内ニ　乙ABC
11　猟師云ク　乙ABC
11　礼ミ奉給フヤ　乙ABC（Cのフは変）「礼シ奉給ヤト」国「礼ミ奉給ヤト」底大（ミは変　シに近し）
12　年来ノ　乙ABC
15　谷サケヒ　乙AC
16　動ク逃タル　乙A
17　事ノト　乙AB
17　猟師云ク　諸大
一七一
1　躰ル也　★「射ル也」乙ABC（Bの射は変）「射ツル也」底国大
1　云ケレハ　諸大
2　菩薩　乙ABC
2　行キ見レハ　ABC
4　醒ニケリ　乙ABC「醒ニケリ」底国大

「醒」の譌とすれば、名義抄によりサマタレの訓（汰・慢にも見える）が得られる。サマタルは酔って乱れる意に用いられることがあるが、茲では、ゆるむ・くずれる・とけるの意か。」

5　者　乙ＡＢＣ

7　事也ナム　乙ＡＢＣ（ＡＣのムはン）

巻二十第十四話

一七一10　野于變人形請僧為　大

講師語第十四

標目だけあり本文欠　諸大

標目の後、半枚空白

巻二十第十五話

一七一14　攝津国　乙ＡＢＣ大（乙ＡＢＣ大は國）「攝國」底国

「古本「津」を脱せるは「摂州」に類似したものか。」

14　家大キニテ富テ　乙ＡＢＣ

15　神ノ祭ヲ　乙ＡＢＣ

15　敦シツレハ　ＡＢＣ

16	致サセケリ	乙ABC
16	祭リ畢テ後ハ	乙ABC（Bの畢は変）
17	秡イ祭ルト	乙ABC
一七二1	我レハ	乙ABC
2	依テ也ト思テ	乙ABC「依テ也思テ」底国大
2	悔ヒ悲ムカ為ニ	乙ABC（Bの悔は変）
2	毎月	乙ABC
2	六斉日ニ	乙ABC
2	戒ヲ受ヌ	乙AC
3	行セリ	乙ABC「行ケリ」底国大
4	遂ニ死スル刻ニ	乙B　ACは脱
7	立チ衛テ	乙AB
8	将入ヌハ	乙AB
9	向テ	諸大　諸本かく作る。
9	人也	乙ABC
9	其時ハ	乙ABC
10	俎ト	乙ABC（Bは変）「俎ト」底国大
10	食テ	乙ABC
12	咎也	乙ABC
12	此ヲ	国AC

12　訴フ事　「訴タフ事」諸大「終止形の連体法の例。」
15　食テム　乙AB
16　定メ煩ヒ給テ　乙ABC
17　多カルニ万ニ　乙ABC
一七三1　人方ニ　乙ABC
2　舌嘗ヲシテ　「舌嘗ヲシテ」乙AB（Aのヲはラに近し）
2　効ヲシ　乙ABC
5　放ケン所ノ　乙ABC（乙はム）
6　云ニテソ悟ケル　AC
7　崇スメ　乙ABC（乙ABCはシテ）
8　弥ヨ　乙ABC（Bの弥は変）「弥ニ」底国大
「古本かく作るに従えば、よみはコトゴトニ（名義抄）。」
8　此人ノ　乙ABC
8　郡天宮　ABC
9　命修ル時ニ　ABC
9　病無クシテ　乙ABC（乙ABCは无）
9　餘テ死ニケル　ABC

巻二十第十六話
一七三14　豊前ノ国ノ　ABC

15　死ヌ　乙ＡＣ「死ス」底国Ｂ大
17　二ノ澤ヲ　乙Ｂ
一七四1　塗ヲ以テ　乙ＡＣ「塗テ以テ」Ｂ「塗リ以テ」底国大
「霊異記の「以金塗厳」の誤訳。」
1　厳レ　乙ＡＢＣ
2　宮人　ＡＢＣ
2　兵也　乙ＡＢＣ
3　王在ス　乙ＡＢＣ
4　愁へ申セシニ　乙ＡＢＣ「愁ハ申セルニ」底国大
「「愁へ」の譌。流布本、正しく作る。」
5　鐵釘ヲ以　国ＡＣ
6　搔挙テ　乙ＡＢＣ（乙ＡＢＣは擧）「揆擧テ」底国大
「「搔」の譌か。流布本、正しく作る。」
8　死セル時　乙ＡＢＣ
8　我不惜ズ　乙Ｂ（乙Ｂはシテ）
10　不當ト宣フ又　ＡＢＣ（Ｂのヌは変）「不當ト」乙「不當ズト宣テ又」底国大（ストは補入傍書の如し）
14　受給ヘルト　乙ＡＢＣ
16　槁ヲ人ニ　Ｂ「稿ヲ人ニ」諸大
17　不奉養　乙ＡＢＣ

一七五1　詈リ打ツ　乙ＡＢＣ「詈リ打バ」底国大
2　如此ノ罪ノ故ハ　Ｂ
2　被打迫ル　乙ＡＢＣ「破打迫ル」底国大
「破は「被」の譌か。」
2　被免テ　諸（底の免は蒙と免との混淆）
3　経ヲ寫テ　乙ＡＢＣ（Ｂの寫は変、乙ＡＣは寫）「経ク寫テ」底国「経ウ寫テ」大
「古本、クの如く見ゆるを、ウの譌と見る。ウは「経」の捨てがな。」
4　七月七日ニ　乙ＡＢＣ
4　弃テキ　諸
6　入シ時　底国
7　不浄ノ物噉フ　乙ＡＢＣ「不浄ノ物ヲ嚴フ」底国大
「「噉」の譌。流布本、正しく作る。」
8　一舛ヲ　「一升ヲ」諸（乙ＡＢの升は異体、底国はその変）
8　報ニ　諸（底の報は変　旁を艮に作る）
9　経ヲ令讀タリシニ依テ　乙ＡＢＣ「経リ令讀タリシニ依リ」底国「経ウ令讀タリシニ依リ」大
「古本、リの如く見ゆるを、ウの譌と見る。」
9　依テ　流布本「依リ」大
10　造ラムハ　諸（ＡＣのムはン、底国はムみせけち）
10　行セハ　乙ＡＢＣ「行バ」底国大
12　争テ恐々ル　乙ＡＣ「争ヲ恐々ル」Ｂ「恐〻ル」底国大

12　而ル　乙ABC
13　遮テ　諸大「遮ノ」B
13　徘徊ノ　国乙AC「徘徊ノ」B「徘徊ノ」底大
14　蹉テ　乙AB
16　汝此　乙ABC
一七六1　流布セリ　乙ABC
2　此ヲ知テ　乙BC

巻二十第十七話

一七六7　年老タル　乙ABC
7　有ケリ　乙ABC
7　共寡ニテ　乙ABC
10　此ヲ猒フ　「此女ヲ猒フ」乙「此レヲ猒テ」底国大（猒は異体）「此ヲ厭フ」C
11　養ハム　乙ABC
12　割テ　諸（底国の割は異体の変　害を客に作る）
12　家ノ人分飯ヲ分テ　乙ABC
14　家ノ中ニ　乙B
15　不食ス　AB
16　食物クシテ　乙AB
16　農業　諸（底の業は異体の変　葉に近し）

17　怠ナムスト　　ＡＢ（Ａのムはン）
17　飯ヲ与テ　　乙ＡＢＣ「飯ヲ与フ」底国大
一七七1　在り　　諸大「有リ」Ｃ
1　付テ　　乙ＡＢＣ「嗔付テ」底国大
1　蜿十具　　ＡＢＣ（ＡＢの十はナに近し）「蜿十貝ヲ」乙「蜿十貝」底国大
4　其米五許ト　　乙Ｂ
6　松ノ本ニ　　Ｂ「松ノ木ニ」乙ＡＣ「栢ノ木ニ」底国大
7　詫　　「詫」大　「託」ＢＣ　正字は「託」。
7　死タリトモ　　ＡＢＣ
9　死シ時　　乙ＡＢＣ
9　在テ　　諸大
11　老嫗ヲ　　乙ＡＢＣ
13　放チン所ノ　　乙ＡＢＣ（Ｂの放チは変）
14　生タル者リ　　乙ＡＢ
14　我カ頸ヲ　　乙Ｂ「我カ額ヲ」Ｃ「我ガ願ヲ」底国Ａ大（Ａのカは変）
「霊異記は「頸」。」
16　焔　　「焔」大　古本の旁は旧。
16　猒ヒ憊シ罪ヲ　　乙ＡＢＣ（Ｂの憊は変）
17　将返ス　　乙ＡＢＣ
一七八1　施スハ功徳　　乙ＡＢＣ

巻二十第十八話

一七八 5 冥途　諸（底の冥は変　冖冠をムの如く作る）

6 此女忽ニ　★「此女忽ニ」乙ＡＢＣ「此ノ女息ニ」底国大

「古本かく作るは、「忽」の譌か。流布本および霊異記「忽」に作る。」

7 直ク□味ヲ　諸本欠字。「直シク□味ヲ」大

7 此ヲ饗ス　乙ＡＢＣ

8 此ノ病フ女ヲ召ニ　乙Ｂ「此病フ女ヲ召テ」ＡＣ「此ノ病ノ女ヲ召ニ」底国大「よみは、ヤマフもしくはヤモフ（名義抄・字類抄）。」

9 此レニ䭾　乙ＡＢＣ

10 有カト　乙ＡＢＣ

12 緋袋ヨリ　乙

12 鑿　乙ＡＢＣ「鑿」底国大

「古本のこの字体は「鑿」の通体「鑿」の省文。」

12 立テ　乙ＡＢＣ

12 女ヲ　乙ＡＢＣ

15 免ス事　ＡＢＣ

17 然レハ女ノ魂　乙ＡＢＣ

一七九 2 未タ有リヤト　諸

3 然ハク其ノ山田郡ノ　乙Ｂ

4 活テ云ク　諸

6　思ヒ忌タルカト　乙B「思ヒ忘タルカト」AC「思ヒ忘タルヤト」底国大
7　驚キ恠シム間　諸大
8　冥途ニテ　乙ABC
9　生タリシ時ノ事共ヲ　乙ABC大「生タリシ時事ノ共ヲ」底国
「古本かく作るが、流布本によりて訂。」
10　魂現ニソレナレハ　乙ABC「現ニ其ナレハ」底国（現の右上に魂補入）「魂現ニ其ナレバ」大
「攷証、この次に「カヒナシトモ」の一句を入れるが、諸本になし。」
12　養ニ　諸大
12　財ヲ〔　脱　〕此ノ　流布本「領シテゾ有ケル此以」を欠く。
「財ヲ〔領シテゾ有ケル。此以、〕此ノ」大「古本かく作るは、次行の文末に牽引されての衍文であろう。」
13　領シテ　諸大
14　有リ事也又　乙ABC
15　葬ス事　ABC（Bの葬は変）
15　万カ一モ　乙ABC
15　此ル事　諸大

巻二十第十九話
一八〇　4　敷賀ノ　底乙B
5　馬ヲ借テ　諸

7　追着テ来ル　　乙ＡＢ「追付テ来ル」Ｃ「追着テ副テ来ル」底国大
8　我ホ　　乙ＡＢＣ（乙ＡＢＣは等）
9　此ヲ聞テ　　乙ＡＢＣ
9　然カ云　　乙ＡＢＣ
10　家ニ　　乙ＡＢＣ
10　求メ得タル　　乙ＡＢＣ
12　云ツレハ　　乙ＡＢＣ
12　免タル也　　諸
13　有カト　　流布本「有ヤ」大
13　道シテ　　乙ＡＢＣ
13　今食ムト　　諸
14　無シテ　　「无シテ」諸大
　　会話文末が地の文に融合していることに注意。
15　大キニ　　諸
17　班ナル　　乙ＡＢＣ（乙の班は変）

一八一
1　免シテ　　諸大　このテは「テハ」の意。
3　其年ノ　　ＡＢＣ
4　我ホカ　　ＡＢＣ（ＡＢＣは等）
5　金剛般若経　　乙ＡＢＣ「金剛盤若経」底国大
　　「古本かく作るが、正字は「般」。」

5　令讀メヨト　乙ＡＢＣ
5　高作丸ト云フ　乙ＡＢＣ
6　仲智丸ト　諸
6　三ヲハ　乙ＡＢＣ
6　名乗テ　大　底本「垂」ノ異体に作る。
7　明ニ　乙Ｂ
7　行キ　ＡＢＣ
7　仁耀ヲ　乙ＡＢＣ「仁耀ク」底国「仁耀ウ」大
「古本ウをクに作れるを、「耀」の捨てがなと見て訂。」
9　満テツ　諸大
9　晩ニ　乙ＡＢＣ
11　云テ　乙ＡＢＣ
11　搔消（カキケ）ツ様ニ　諸（底の搔は変　旁を発に作る）
13　大寺　大「大安寺」ＡＣ
13　返シ不納シ故ニ　乙ＡＢＣ「返シ不納サレ故ニ」底「返シ不納ザル故ニ」国大　国により訂。
13　存セル也　諸（底のルはリの上に重書せるものの如し）
13　錯（アヤマ）レリト　乙ＡＢＣ
14　貴事也ト　乙ＡＢＣ

巻二十第二十話

一八二　2　依西業　　乙ＡＢ

3　恵昧ト　　諸大「諸本かく作るが、霊異記「恵勝」とする。」

6　不知ス僧　　乙Ｂ

6　犢ヲ　　諸（底の犢は変　旁を責に作る）

6　恵昧法師カ　　乙ＡＢＣ

7　涅槃経ヲ　　底国乙Ａ（底の涅は変　旁は具に近し）

7　涙ヲ　　諸（底は変　渡に近し）

7　死ヌ　　乙ＡＣ

8　大ニ瞋テ　　国乙Ｂ（Ｂの瞋は変）

8　詈テ　　諸（底は変　罒を日に作る）

8　咀ヒ敍シツル也　　乙ＡＢＣ「咀ヒ敍ヒツル也」底国大

「正字は「詛」。この字は、もと、カムと訓じ「咀嚼」と熟する字であるが、字類抄、ノの人事にも「咀」をノロフとよみ、シの畳字「呪詛」の注にも「咀ィ本」と見える。」

10　端正ニシテ　　諸（底の端は変　糸偏の草体もしくは行人偏の如くに作る）

13　書寫〆持参シタルニ　　乙ＡＢＣ（乙ＡＢＣは写）「書写シテ持参タル」底国大（底国ＡＢのシテは合字）乙

15　人ニ令知ムカ為ニ　　諸（底の咎は変　否に近し）

16　咎ヲ　　乙ＢＣ

17　借用セン物ヲハ

17　恼ニ　　ＡＢ
17　死スルハ　　乙ＡＢＣ
一八三1　畜生ト成ル　　乙ＡＢＣ

巻二十第二十一話

一八三5　多磨郡　　諸大「諸本かく作るが、倭名抄には「多磨郡」と見える。」
5　天平勝寶元年ノ　　★「天平勝寶元年ト云年ノ」乙ＡＣ「天平勝寶元年」底国Ｂ（底国はト云フ年ノと補入）「天平勝寶元年ト云フ年ノ」大
8　死ヌ　　乙ＡＣ
9　同寮庵　　「同寮等」底国乙ＡＢＣ大
9　造ハ必ス　　「古本及び霊異記三昧院本かく作る。正字は「僚」。」　乙ＡＢＣ
9　可記事也ト云テ　　乙ＡＢＣ（乙の也はナリ）「可記事也云テ」底国大　「流布本によりて補読。」
10　六月ノ一日　　乙ＡＢＣ「六月ノ一日ノ」底国大
11　本ヨリ懺悔ノ心　　諸（底の懺は変　木偏に作る）
11　心ヲ改テ善ヲ行ス　　乙ＡＢＣ（Ｂのヲ・善、Ｃのテは変）
11　深ク　　「涂ク」大「古本のこの字体は、「深」の俗体「涂」の譌。」
13　辟ヒ　　「譬ヒ」底乙Ａ（底は異体の変　言を一＋口に作る）

巻二十第二十二話

一八四 3 一ノ寺造テ　乙BC

3 名ク藥王寺ト　乙B

4 置テ　乙ABC「宜テ」底国大（底のテはラに近し）

5 恐田村ノ主ト　乙ABC（底国Aの岡は異体、BCは変）

5 始ノ家ニ　乙B（Bの始は変）「姳ノ家ニ」底国大「娘ノ家ニ」AC

6 酒ニ造テ　乙AC

8 一人トゞモ　乙ABC（乙ABCはシテ）「一人モ」底国大（モにトシテと傍書）

11 夢ニ　乙ABC「葬ニ」底国大

「古本かく作るは「夢」の異体「梦」の変。」

13 膝ヲ曲メテ　諸（底のヲは変　ウに近し）

13 前ニ　乙ABC

14 酒ニ計ヲ　乙ABC

14 借用シテ　乙ABC

乙B「備用シテ」AC「僦用シテ」底国大

「「貳」の俗体「僦」の譌。名義抄に「貸」の俗字として見える他、「従人求也」と注する。字類抄には、借（カル・カス・カリ）の次に「仮・僦」と見える。借用の意。」

14 其ノ直（アタイ）ヲ　乙B

15 哀ニテ心　乙ABC

16 其痛ム　乙ABC

16 非スヨリハ　乙ABC大「非ス」底国（スの右下にヨリハ補入）

17　示ス　「諸本かく作る。「自非檀越」の、誤れる訓読。」
17　示スト云ヘトモ　大　底本の字体は「ネ」。
17　問テ　乙ＡＢＣ
一八五1　酒造ル　乙ＡＢＣ「問テ云」底国大
2　家ニ行キ　諸（底国の酒は異体の変）流布本は正字に従う。
3　普ノ人ニ　乙Ｂ
4　寺ノ僧浄侶達　乙ＡＢＣ
4　畢テ　乙ＡＢＣ「寺ノ僧浄達」底国大
5　不見ヘ〆　諸（底は変　卑に近し）
6　大哥恐シ　乙ＡＢＣ（乙ＡＢＣはシテ）
7　償也ケリ　乙Ｂ（彦乙の奇は変、Ｂは奇）
7　語リ傳ヘタルトヤ　乙ＡＢＣ「償也」底国大
乙ＡＢＣ

巻二十第二十三話
一八五11　年来ノ　乙ＡＢＣ
11　生レムト　ＡＢＣ（ＡＣのムはン）
12　道ニテ　諸
12　他ノ思無カリ　乙ＡＢＣ（乙ＡＢＣは无）
13　皆貴思　乙ＡＢＣ

14　年積テ　諸（底の積は変　偏は釆）
14　七十餘程ニ　乙ＡＢＣ
14　身強カリト　乙ＡＢＣ
16　緩モ無シ　乙ＡＢＣ（乙ＡＢＣは无）
17　弟子共ニ　乙ＡＢＣ

一八六

1　勧ムル事　ＡＢＣ
2　申時計ニ　乙ＡＢＣ「申時斗ニ」底国大
「「計」「斗」の正字は「許」。
2　五色ノ糸ヲ　乙ＡＢＣ「五尺ノ糸ヲ」国「五□ノ糸ヲ」底（尺と書いて消した跡あり）
3　四五十遍許　乙ＡＣ
4　責カリ喜テ　乙ＡＢ
6　常ニ　諸
7　蚕屋ノ　諸（彦岩底国の壺は異体の変　右＋関の如き字体）
7　酢瓶（ス）　乙ＡＢＣ
8　五寸計　大「五寸許」乙Ｃ
9　木ノ上ニ　乙ＡＢＣ
11　唱ツルヨリ　乙ＡＢＣ
11　死スル剋ニ　乙ＡＢＣ
12　棚ノ上ニ　乙ＡＢＣ「棚ノ上ニノ」底国大
「「上ニ」と「上ノ」との混淆か。」

13　思ケリトモ思不返〆　ＡＢ（ＡＢはシテ）
15　失ヌ見テ　乙ＡＢＣ
17　明ル朝　国乙ＢＣ
一八七2　心發ストモ　ＡＢＣ「心發」乙「心發スト」底国（ストの左に云トモ補入）「心發スト云トモ」大
2　□ノ縁ニ　諸大
3　難カリナムト　乙ＡＢＣ（ＡＣのムはン）
3　思フカ悲キ　乙ＡＢＣ「思ムガ悲キ」底国大
4　不可見トソ　乙ＡＢＣ

巻二十第二十四話

一八七12　三年　乙ＡＢＣ
13　見ルニ　諸大
14　恐レ怖レテ　乙ＡＢＣ
14　毒蛇ハ必ス　ＡＢＣ（ＡＢＣは蛇）「毒蛇ス」乙「毒蛇ヲ必ズ」底国大
「古本かく作るは、「此ノ毒蛇ヲ「……」ト思ニという構造が、上の「恐ヂ怖レテ思ク」と重複しつつも脳裡にあったからであろう。」
17　依テ　諸
一八八1　不可開ト　乙ＡＢＣ
2　生タリシ時　大「古本、傍書に「死ニ」（ニは、「歟」の譌か）とあるが、このままで文意の理解に差し支えない。」

3　臨タラハ　　ＡＢＣ
3　受ケムヤト　　乙ＡＢ（Ａのムはン）

巻二十第二十五話

一八八6　打乞食ヲ感現報ヲ　★「打乞食感現報」乙ＡＣ「打乞食ニ感現報ヲ」Ｂ「打乞食ヲ感ル現報ノ」国「打乞食ヲ感ル現報ヲ」底大

8　打ムト為ル　諸大（底はルに加筆してレハとせる如し、ＡＣのムはン）
「諸本かく作る。「為ルニ」の意。底本「為レバ」の如く訂するは、さかしらであろう。」

8　乞食逃テ　乙ＡＢ大「乞食ヲ逃テ」Ｃ「尼食逃テ」底国
古本「尼食」に作るを、流布本により訂。

9　侘テ　「侘テ」古本Ｃ大　正しくは「侘」
意訳すれば、逃げる術を失って。

9　誦〆　国乙ＡＣ（国乙ＡＣはシテ）

10　被縛ヌ　諸（Ｂのヌは変）

12　其人ハ　乙ＡＢＣ

12　助ケント　ＡＢＣ

13　助ケンカ為　国ＡＣ

14　愁ニ　乙ＢＣ

巻二十第二十六話

一八九3　打破テ乞食ノ鉢感現報★　「打破乞食鉢感現報」乙「打破テ乞食鉢感現報」AC「打破ナ乞食ノ鉢感現報」B「打破テ乞食鉢ヲ感ル現　報ヲ」底国大

4　白髪部ノ　乙AC

4　心邪見ニ〆　乙ABC（乙Cはシテ）

5　人ニ物ヲ　諸（底は人とニ近接して今の如く作る）

6　家ニ至テ　乙AB

6　物ヲ乞フ　乙AC「物ケ乞フ」B「師ヲ乞フ」底国大

「古本かく作る。クヒモノの意の「食」を類音の字で表記したものか（字類抄、クの飲食に「食」の訓をクヒモノ・クラフ、音をシ・ショクとしるす）。或は、物（モノ）を、モロ（師）と誤り聴いてかく写したものか。霊異記「乞食」。」

7　悪事有テ　乙ABC

8　人ノ倉ノ　乙ABC

9　死ヌレハ　諸大「死スレバ」B

10　知テ　乙ABC

12　忿テ　B「急テ」乙AC「怠ラ」底国（ラにテと朱傍）「怠テ」大「進んで、の意。」

12　何況ヤ　乙ABC「何況フヤ」底国大

「古本かく作るは、イハムヤの音便形、イハウヤの表記と見られる。同時代の類例としては、法華百座六月十九日の条に「マウサウニシタガヒ」の例が見える。」

13　化身ハ在ナム　乙B

巻二十第二十七話

一九〇 2 感ル現報ヲ　底国B

4 大政大臣ヲ　乙AB

6 藍カハシリク　乙「藍カハシリタ」B「藍カハシリ」底国「藍ガハシク」AC大　「諸本かく作る。「監」の増画とも、三水と草冠とを代替したものとも取れる。」

7 沙弥ノ頭ヲ摩　乙AC「沙弥ヲ頭ヲ摩」B「沙弥ノ頭ヅ摩」底国「ヅは「頭」ノ全訓すてがな。」

11 蒙レリ　諸（底の蒙は返　草冠＋彖に作る）

11 必死ナムト　乙AB（乙Aのムはン）

12 他ノ為　乙ABC

12 我被敍ヨリハ　乙ABC「我被敍ムヨリハ□」底国大（空白で行末）

12 毒ヲ　乙ABC

13 毒ヲ服〆　乙ABC（乙ABCはシテ）

14 屍骸ヲ　諸（底国の骸は変　旁を底は宛　国は充の異体に作る）

15 多ク百姓此レヲ　★「多ク此レヲ」AC「多テ百姓此レヲ」B「多ク百姓此ヲ」乙「多ク死ヌ百姓此レヲ」底国大

16 氣ニ依テ　乙ABC「氣ニ依ニ」底国大

17 □ヲ　諸大

17 海部ノ郡ト　B

17 椒抄ノ具ノ　乙ABC「椒抄ノ奥ノ」底国大

17　見ヲ聞テ　「諸本及び霊異記かく作るが、「抄」は、或は「桙」の誤りか。「抄」「桙」、共にハジカミとよむ（字類抄。名義抄は前者だけ）。」

ＡＢＣ「見聞テ」乙「見ヲ聞テ人」底国大

巻二十第二十八話

一九一　6　捕兎　乙ＢＣ

7　□郡ニ　諸大

10　幾ノ程ヲ　底国Ｂ大「幾程ヲ」乙ＡＣ

10　毒ノ瘡　諸（底の瘡は変　倉を君に作る）

11　見聞ク人　ＡＢＣ

12　蒙ル也ト　ＡＢＣ

13　命ヲ惜ム　乙ＡＢＣ

14　敦生ハ　底国（生の右下にヲ補入）

巻二十第二十九話

一九二　3　□郡ニ　諸大

3　名ヲ　ＡＢＣ「名ヲハ」乙「名バ」底国大（名の右下にヲ補入）

3　爪ヲ　乙ＡＢＣ「瓜ヲ」底国大（瓜は異体）

5　不堪ヘ　乙ＡＢＣ

5　負スル　ＡＢＣ

6　無キ故ニ　乙ＡＢＣ
7　不止ズ　乙ＡＢＣ（乙ＡＢＣはシテ）
9　怒ニ　★「忽ニ」諸大（底の忽は変　急忽との混淆）
10　感セトトソ　底国乙

巻二十第三十話
一九二16　心邪見ニシテ　乙ＡＢＣ
一九三1　六年ト云年ノ三月ノ　乙ＡＢＣ（乙の下の年は歳）
2　兵士　ＡＢＣ大「丘士」乙「丘士」底国（兵士と朱傍）「よみは、ヒヤウジもしくはツハモノ。」
2　生テ云ク　乙ＡＣ
2　国司ヲ召ス　乙ＡＢＣ
3　至ル　乙ＡＢＣ
3　山真ノ里　諸大「山奥」Ｃ「山直」が原姿。
5　他ニ　乙ＡＢＣ
5　叫フ　乙ＡＢＣ
5　勢力熱（アツ）ヤト云　★「勢力熱ヤト云フ」ＡＢＣ（Ｃの熱は勢）「熱カ熱カト云」乙「熱ヤ熱ヤト云フ」底国大
6　入為ニ　乙ＡＢＣ
7　思ニ　諸大

7　引ニ　　諸大
8　引出シツ　　乙ＡＢＣ「引出」底国大
9　男　　諸
9　地ヲ踏ニ　　乙ＡＢＣ
10　衛テ　　乙ＡＢＣ
11　走廻ル也　　乙ＡＢＣ
11　爛テ骨現ユ　　乙ＡＢＣ「爛ニ骨現也見ニ」国「爛ニ骨現也見ユ」底大（底国の也は草体にしてやや右寄りに小書）
13　報ヲ示ス也トソ　　乙Ｂ「報ヲ示也トソ」ＡＣ「報ノ示也トゾ」底国大
14　不可敍生ヲ　　乙ＡＢＣ
15　實也ト　　乙ＡＢＣ

巻二十第三十一話

一九四　3　大和国添ノ上ノ郡ニ　　諸（底国の大和國は傍書補入、諸は國）
4　明暮レ文ヲ　　Ｂ
7　塔ヲ　　諸
8　不信〆　　乙ＡＢＣ（乙ＡＢＣはシテ）
9　繚テ　　ＡＢＣ
10　我レ　　諸大　乙はこの前後脱

12　今母子ノ道ハ　諸

13　裁（コトハリ）リ給ヘト　諸大（底国の裁は変　衣を禾に作る）

「古本、「衣」の代わりに「禾」に作るは、「程」を「裎」と書くが如き通用に基づく。流布本によりて訂。」

14　痛テ　乙ＡＢＣ

15　我　乙ＡＢＣ「我ニ」底国大

「自分から、の意の「我ト」に通ずるものとも、「我ニモ非ズ」の意とも取れる。また、「俄ニ」の省文とするのも一案。」

17　食物無シテ　乙ＡＢＣ（乙ＡＢＣは无）

一九五2　不可成トナム　乙ＡＢＣ（ＡＣのムはン）

巻二十第三十二話

一九五5　為依不孝　底国乙Ｂ

7　寡ニ〆　乙ＡＢＣ（乙ＡＢＣはシテ）

7　乞テ食ハト　乙Ｂ（Ｂのテは変）

8　可令食キ　乙Ｂ

9　幼キ子ヲ　底国Ｂ「幼キ子ヲ」乙ＡＣ大　「幼」は譌。

9　裏（ツヽミ）タル　諸大

10　飢ノ心　乙ＡＢＣ（乙の飢は変　金偏）「飢ヘ心」底国大

「古本かく作るは、「悲ビ心ニ不堪シテ」と同じ語法か。」

10　喜テ寝ヌ　　諸（底の寝は変　穴冠にて爿を方に作る）
11　夜半計程ニ　　ＡＢＣ
12　我ト忽ニ　　乙ＡＢＣ（乙の我は吾）
14　此レ極テ　　Ｂ
14　不孝不養〆　　乙ＡＢＣ（乙ＡＢＣはシテ）
14　死スレハ　　ＡＢＣ
15　我レ夫二人　　乙ＡＢＣ（乙の我は吾）
17　可孝養キ也トナム　　諸（底国の也は小字也トナムと書けり）

巻二十第三十三話

一九六　4　吉志火丸　　ＡＢ
4　早部ノ　　乙ＡＢＣ「甲部ノ」底国「早部ノ」大
「甲」は「日下」の合字「旱」の譌。写本多く「旱」に作ることは、椹斎の攷証に詳しい。」
4　真屓也　　諸大
5　□ト云　　諸本欠字「□ト云フ」大
6　行ヌ　　乙ＡＢＣ「行ヌトハ」底国大
「古本かく作るは「行ヌレバ」の譌か。」
7　7　不相ヒ見　　乙Ｂ
7　不能ハ　　乙ＡＣ

8　喪服ノ　乙B「喪服ノ」底国大「表服ノ」AC
「古本かく作るは「喪」の譌。乙Bは正字。」
乙ABC（Bのテは変）「被計テ」底国大
「古本かく作るは「許」の譌。乙ABCは正字。」
8　被許テ
9　慈悲有ニ　乙ABC
9　常善ヲ修ス　ABC「常ニ善ヲ修ス」乙「常ニ養ヲ修ス」国「常ニ養ヲ修ヌ」底大
「古本かく作るは「供」を脱したものか。」
11　可詣スシト　B「可詣ト」AC「可詣シト」乙「可訪シト」底国大
11　身ヲ浄メテ　乙ABC「身シ浄メテ」底国（シは他の草体に作る）「身ミ浄メテ」大
「古本「シ」（但し、変）に作れるを、「身」の全訓捨てがなと見て訂。」
11　共ニ行ク　乙ABC「共ユ行テ」底国大
12　不見ヘ　乙ABC
14　託タルカ　乙AC（Aの託は詫）
15　隠レムカ為　乙ABC（ACのムはン）
16　致スト　ABC
一九七1　此ノ一ノ衣ハ　乙
1　我カ弟　乙ABC
4　此レヲ實ノ罪ニ非ス　ABC「此ヲ實ノ罪ス」乙「此ヲ實ノ心ニ非ズ」底国大
「諸本かく作る。文末の「免シ給へ」に直接するものか。」
5　落入リ畢ヌ　諸（底の畢は変　日＋干に作る）

5　母カ捕タル　乙ＡＢＣ「母ト捕タル」底国大
5　抜テ　国乙ＢＣ
5　挙リ乍ラ　ＡＢＣ
6　誦テ　ＡＣ
6　筥ニ　乙ＡＢＣ大「笘ニ」底国
8　憾ミ給フ　「憾給フ」底国大（憾は変　手偏）
8　敦サムマテノ事ハ　ＡＢＣ

巻二十第三十四話

一九七13　建立ヨリ　諸大
15　達广宗ヲ　「達磨宗ヲ」諸大
15　遣レヤリケルニ　乙Ｂ（Ｂのレは変）
15　書テ　諸大
16　出雲ノ地　乙ＡＢＣ
17　微妙ナレ𪜈　乙ＡＢＣ大（乙Ｃ大はトモ）「妙微ナレ𪜈」底国（行末なればナレドモを横一行に書けり）
「流布本により訂。」
17　監行　底国大「濫行」乙ＡＢＣ
17　何成ケルニカ　ＡＢＣ「何ナリケルニカ」大
一九八1　破壊シタル也　諸大（底国の也は小字シタル也と書けり）「被壊シタル也」Ｂ（壊は変）

5　侘シキ　流布本「佗シキ」大　流布本「侘」正字。
5　少ク狭ク　底国B
5　有リ　ABC
5　末時ニ　乙AC
6　倒ナムス　AB
6　這行カムニ　乙ABC（ACのムはン）
6　打敧シテ　乙ABC
8　云テ止ヌ　乙ABC「云止ヌ」底国大
9　屋ヲ壊ル　諸（底の壊は変　手偏に作る）
11　柱折崩レテ　ABC
11　裏板ノ　乙ABC「裏杉ノ」底国大
「古本かく作るは、「板」を「杙」と見たに基く譌。」
11　雨水ノ□タリケルニ　乙ABC
12　大ナル魚共　ABC大「大成魚共」乙「大ナル夢共」底国（夢は変　草冠と夕の間に四を二つ重ねたり）
流布本により訂。
12　有ケルニ　諸大
13　違フ事無クシ　B（Bは无）
14　深カ故ニ　乙ABC（Bのニは変）「深故ニ」底国大
14　耽テ　「耽テ」乙ABC（Bは変）「躭」底国大

14　□長キ
15　取ラレ子ハ
16　鎌ト云物ヲ以テ
16　鯰ヲ掻切テ
16　葛ニ貫テ

16　魚共ナト始テ
17　令戴テ

17　此鯰ハ夢ニ
17　敍ソト

一九九
1　童部ノ為
1　取ナム

1　他人
3　他ノ鯰ノ
3　吉キナメル
4　飯レト

「古本かく作るは、「耽」の異体「躭」（名義抄・字類抄に見える）の譌。」
諸大
★「取ラレネハ」乙ＡＢＣ「不被取ネバ」底国大
乙ＡＢＣ
ＡＢＣ「鰓ヲ掻切テ」国乙「鰓ヲ揆切テ」底大
乙ＡＢＣ「蔦ニ貫テ」底国大
「ツタの古名・異名マツナグサを「真綱草」と解することができるならば、此のままで理解できるが、或は流布本の「葛」が原姿か。」
Ｂ
乙ＡＣ大「令裁テ」底国
流布本により訂。
底国Ｂ
諸大
ＡＢＣ
Ｂ「取ナン」乙ＡＣ「敢ナム」底国大
「「噉」の省文と見る。（構わない）食べてしまおう。」
乙ＡＢＣ
乙ＡＢＣ「他ノ鯰ヨリ」底国大
乙ＡＣ
乙Ａ

4　ヱツ〳〵ト　乙ＡＢＣ「エフ〳〵ト」底国大
「このフを、促音符と解すれば、流布本の「ヱツ〳〵ト」と同じ擬態語になる。」

巻二十第三十五話
一九九12　法ヲ学〆　乙ＡＢＣ（乙ＡＢＣはシテ）
13　美濃守□ノト　乙ＡＢＣ「美濃ノ守□ノ□ト」底国大
13　願ケリ　ＡＣ「願ナリ」Ｂ「願ケリ」底国乙大
16　京ニ有ル　乙ＡＢＣ
17　可行キ事ヲ　乙Ｂ「可行事ヲ」ＡＣ「可行ヲ事ヲ」底国大
「古本かく作るは、「キ」の譌か。」
二〇〇1　志シ　Ｂ「志シヲ」Ａ「忠ヲ」底国「志ヲ」乙Ｃ大
「流布本により訂。」
2　褰ク　乙ＡＢＣ
3　懐国供奉ト　乙ＡＢＣ「懐國供養ト」底国大
「古本かく作るは「供奉」の誤り。流布本は正しく作る。」
3　請スル　諸大
5　戯ルレハ　「戯レバ」諸大
6　失サセ給ヒケレハ　乙Ｂ
6　老タリ　乙ＡＢＣ
6　事ノ縁モ　乙ＡＢＣ「事ヲ縁モ」底国大（ヲにノ歟と朱傍）

7　失サセ給ヒヌ　「このヲは、ノの古体「乃」の譌か。」
乙ＡＢＣ

9　居タレハ　乙ＡＢＣ「居ル」国「居タルハ」底大

12　此ク居タリ　乙ＡＢＣ「此ニ居タリ」国「此テ居タリ」底大

13　房ニ□タル　乙ＡＢＣ「房ニタル」底国大

13　法服直シク　ＡＢＣ「法服直シテ」乙「法服真シク」底国大（底国ＡＣの服は変　旁を艮に作る）「古本かく作るは「直」の誤り。流布本は正しく作る。」

14　烈　大「列」Ｃ　「烈」は「列」の通字。

14　乘スレハ　大「乘ヌレバ」乙Ｃ

15　登〆　乙ＡＢＣ（乙ＡＢＣはシテ）

16　書之奉ニ　乙ＡＢＣ

16　佛供共モ　乙Ａ

17　微妙ニ〆　乙ＡＢＣ「微妙クヒテ」底国大（ヒにシ歟と朱傍）ヒはシの譌。

二〇一

2　長刀提タル　乙ＡＢＣ

2　七八人計ヲ　乙ＡＢＣ「七八人許ノ」底国大

3　嗔テ云ク　国乙

3　進シカ　「進リシカ」諸大

5　一供奉ソナム　★「一供奉ソナン」乙ＡＣ「二供奉リナム」Ｂ「一一供奉ヲナム」底国大（底のナは重書して訂せしもの）

6　筴リ奉ルニハ　諸（蔑は変　竹冠＋皿＋戈）
6　事闕ト云トモ　乙ＡＢＣ
7　為マシ　諸大
8　覆サムト　「覆サムト」乙ＡＢＣ（ＡＣのムはン）「覆スサムト」底国大
8　丸ミ下ル（マロ）　乙ＡＣ
8　長短ナレハ　乙ＡＢＣ
8　逆ニ倒レヌ　乙Ｂ
9　迫マリ　ＡＢＣ
10　講師共ニ　ＡＢＣ
10　我ニ非ヌ　乙ＡＢＣ
10　行ヒモ非ス　底国
10　乱ヌ　乙「乱ス」諸大
10　国ノ者モ　乙ＡＢＣ
11　行ケレハ　乙ＡＢＣ
12　本意無キ氣色也　乙Ｂ（乙Ｂは无）
14　任モ畢レハ　ＡＢＣ「住モ畢レハ」乙「任モ最レバ」底国大
「最花」をハツホとよむところから、また「最」にハテの意も寓せられるところからすれば、敢て訂するにも及ぶまい。」
15　而ル間　乙ＡＢＣ「而ル不」底国大
「古本かく作るは、「間」の草体の変か。」

15　白癩ト云病　　乙ＡＢＣ（ＡＢの癩は変）「白癩ト云テ病」底国大（癩は草体の変）
16　三月　　諸大
16　三月計　　「三月許」諸大
二〇二1　嫉妬セルニ　　諸（底の嫉は変　旁を挟に作る）
3　此レヲ知テ　　諸（底は知テを合し　智の草体の如く作る）
3　語リ傳ヘタルトヤ　　諸「語レリ傳ヘタリトヤ」底大
「底本かく作るは、「語レリ」「語リ」の混淆か。」

巻二十第三十六話

二〇二8　讃良ノ郡郡司ナル　　諸（底の郡は変　君の上にゝを有す、ＡＣの下の郡は々、Ｂはノ欠）
8　男有ケリ　　乙ＡＢＣ「男者ケリ」底国大
8　恐ル、故ニ　　Ａ
9　木供養〆　　乙ＡＢＣ（乙ＡＢＣはシテ）
9　年クレテ　　諸大「暮テ」乙
10　阿闍梨ト　　乙ＡＢＣ「□阿闍梨ト」底国大
11　其ノ日成テ　　ＡＢ
12　高座ノ　　底国乙Ｂ（底の座は変　病垂に作る）
13　檀越何事ソト　　乙ＡＢＣ
14　□テ　　諸大
14　国ノ守ニ□ノト　　乙ＡＢＣ「國ヲ守ニ□ノ□ト」底国大

二〇三

1　思ツルニ　　乙ＡＢＣ「思エツレルニ」底国大

1　此ノ年老タレハ　　諸大（底国の老は変　者の草体に近し）「此老タレハ」乙（年補入）

1　説教共ヲ　　乙ＡＢＣ

2　辟喩モ　　諸（底Ｂの譬は異体の変　底は言を王に作る）

3　高ク捲キ　　乙ＡＢＣ「高ク棒□」底国大

3　詣来□タリ　　乙ＡＢ

3　休マウト　　乙ＡＢ「休」は「休」の異体。

4　講師　　乙ＡＢＣ「講師ノ新ニタル」底国大

「講師の控室に。古本、上の「云テ」以下、下の「守ノ」に至るまで傍書補入。流布本は、補入の位置を誤り、文意続かぬこととなった。」

4　計ニ行ヌ　　諸（底はモトと傍訓）

5　行ヌレハ　　流布本「行ヌレ」大「行ヌレバの意。」

5　奇異ク　　乙ＡＣ

6　聞智人モ无キマ、ニ　　ＡＢＣ

7　功徳トコソ　　ＡＢＣ

7　辟ヘム　　諸（底の譬は異体の変　言を辛の如に作る、Ａのムはン）

8　然〆　　乙ＡＢＣ（乙ＡＢＣはシテ）「然ヲ」底国大

9　座スナリ　　乙Ｂ

10　田舎ノ人　　乙ＡＢＣ

11　檀越　　諸

11　居タル　　乙ＡＢＣ
12　一裏ニハ綾卅疋　　乙ＡＢ
15　此レ其代ニ　　乙ＡＢＣ
16　講師ニ　　乙ＡＢＣ
17　郎ホ　　諸（国Ｂの等は異体）

二〇四
1　□テ　　乙ＡＢＣ「□ラ」底国大
1　暫ク計リ有テ　　ＡＢＣ「暫ク許有テ」乙「暫ク計リ有ニ」底国大
2　親類ナト惜カリテ　　乙ＡＢＣ（Ｂのカは変）「親類ナト糸惜カリテ」国「親類ナド糸惜ガリテ」底大
4　外道ニ　　乙ＡＢＣ「貧道ニ」底国大
「古本かく作るが、「貧道」は僧の自称に用いられることが多く、この場合にはふさわしくない。流布本の「外道」は、或は原姿かと思われるが、外→貧の中間に「劣」を入れて見れば、その変化の過程は、比較的理解し易い。」
4　妨タル　　諸大
5　止ヌ　　乙ＡＣ「止メ」Ｂ「止」底国大
「古本、上の「音ヲ挙テ」以下、下の「泣入テ」までを傍書補入せり。その二行に記せる傍書を、流布本は誤りて二ヶ所に分ち補入せるため構文が乱れている。」
5　泣入テ〔　脱　〕云　　「泣入テ〔咎事无シ。子ノ男出来テハ、「然事候ツル也」〕云」大
6　布施无　　乙ＡＢＣ「布施无□」底国大
7　老ニタメリ　　乙ＡＢＣ
8　妨タルハ　　ＡＢＣ

8　實ニナケレハ　乙ＡＢＣ「実ナレバ」底国大
8　此ハ有ル也　乙ＡＢＣ
8　我ニ於テモ　ＡＢＣ
8　勲ニ　底Ｂ（底は変　勧＋心に作る）
9　彼世ノ事　乙ＡＢＣ
9　説経ノ愚ナルコソ　乙ＡＢＣ「施経愚ナラバコソ」底国大
「古本かく作るは、「説経」を耳で聞いたまま写したものであろうか。」
9　我カ事　乙ＡＢＣ
10　聞テ見ツレハ　乙ＡＢＣ
12　憑キマ、　乙ＡＢＣ
14　誤用ヲ　諸（底国の誤は変　旁を足に作る）

巻二十第三十七話
二〇五　2　被敢　ＡＢＣ
3　冨メル　乙ＡＢＣ
4　有リ　流布本「在リ」大
10　相諸共云ク　乙ＡＢ「相諸共ニ云ク」「相諸云ク」底国大
12　亦血多流レタル　乙ＡＢＣ
13　馬牛ノ　諸
14　呉茱臾ノ　「呉茱臾ノ」乙Ａ

14　噉セルカ　　諸大（底は変　厳の如く作る）
15　重キ崇リヲ　　乙ＡＢＣ「重テ崇リヲ」底国大　「崇」は「祟」の通字。」
15　聞キ集リ来レヲ　　Ｂ「聞キ集リ来ルヲ」ＡＣ「聞集リ来ルヲ」乙「聞テ集リ来テ此レヲ」底国大
16　彼ノ頭ヲ　　ＡＢＣ「彼娘ノ頭ヲ」乙「彼頭ヲ」底国大（彼の下に娘ノと補入）
16　斉會ヲ　　乙ＡＢＣ

巻二十第三十八話

二〇六　6　幼クシテ　　乙ＡＢＣ
6　其ノ名　　★「其名」乙ＡＣ「其ノ石」Ｂ「其ノ各」底国大（各に名と朱傍）
「古本かく作るは、「名」の譌。」
8　僧也ト云ヘトモ　　諸（底は也の右下に更にトと傍書あり）
8　作ヲ成シテ　　Ｂ
8　人ニ　　乙ＡＢＣ
9　春来寺ノ　　乙ＡＢＣ「春米寺ノ」底国大
10　過ム　　乙ＡＢＣ「遇ム」底国大
11　而ル　　乙Ｂ「而ルニ」ＡＣ「而ル間」底国大
11　忽ニ　　乙ＡＢＣ「忽チ」底国大
12　離テ踊ル　　乙ＡＢＣ
15　何計ノ　　大「何許」乙Ｃ
15　哀ナル事　　諸

16　感スル　　諸
16　无カレトナム　　乙ＡＢＣ（ＡＣのムはン）
16　語リ傳ヘタルトヤ　　乙ＡＢＣ

巻二十第三十九話

二〇七　3　清瀧河ノ　　乙Ｂ
3　年来テ行フ僧　　ＡＢ「年来ヲ行フ僧」Ｃ「年来行フ僧」乙「年来ノ行フ僧」底国大「古本かく作るは、「ヲ」の譌か。」
4　カク計ノ行人ハ不有レト　　乙Ｂ
4　時モ有ケリ　　乙ＡＢＣ「時モ□ケリ」底国大
7　上ニハ有テ　　ＢＣ「上ニハ在テ」乙Ａ「上ニハ在」底国大
7　疑シク　　乙ＡＢＣ「嫌シク」底国大
9　副テ上様　　乙ＡＢＣ（Ｂの副は変）「副キ上様」底国大（上様傍訓ノホリサマニ）
9　持佛堂　　ＡＢＣ
10　閼伽棚ノ　　乙ＡＢＣ
11　神サヒタル事　　乙ＡＢＣ「神タル事」底国大
12　窓ノ有ヨリ　　諸（底の窓は変　ウ冠＋悉に作る）
12　置キ散シタリ　　乙ＡＢＣ
12　不断香ノ　　諸

12　満チ　　底国乙大「満テ」ＡＢＣ（Ｂのテは変）
13　年七十計ナル　　乙Ｂ
15　火界ノ　　乙ＡＢＣ
16　睡リ乍ラ　　底国Ｂ
16　香水ニ差シ浸シテ　　乙ＡＢＣ
17　只然ニ　　乙ＡＢ
17　音ヲ挙テ　　乙ＡＢＣ（乙ＡＢＣは擧）
二〇八　2　眠リ醒テ　　ＡＢ「眠ヲ醒テ」Ｃ「睡リ醒テ」底国乙大（底国の醒は変　旁を底は皇、国は呈に作る）
「底本の旁、「皇」の如く作るは、もと「睡リノ醒テ」とあった痕跡を示すか。」
3　其時ニ　　乙ＡＢＣ
3　何ノ御房ノ　　乙ＡＢＣ
4　咎テ云ク　　諸
7　御弟子ニ成テ　　乙ＡＢＣ大（乙の弟は第）「御身子ニ成テ」底国（身は草体　弟と朱傍　ニにトと傍書）
7　云ケルニ　　乙ＡＢＣ
8　無テ有ケル　　乙Ｂ（乙Ｂは无）「无クテ有ケル」ＡＣ「无ク有ケル」底国大
8　憍慢ノ心ヲ　　諸（ＡＢの慢は変）
9　思テ　　乙ＡＢＣ「思ニ」底国大「このニは、ニヨリテの意。」
9　給也ケリト　　乙ＡＢ「給フ也ケリト」Ｃ「給也」底国大（也の右下にタリトと補入）

10　不可成ト　乙ＡＢＣ「不可成トナム」国「不可成ズトム」底大（スは重書して訂せしもの　トの下かな一字分位空白）

巻二十第四十話

二〇八15　其レカ　乙ＡＢＣ

15　冬比ナリ　乙Ｂ

15　河原風　乙Ｂ

16　藁薦（フラ）ト　「藁薦ト」乙Ｂ（Ｂの藁は変）

二〇九1　義紹院此ハ何ナル　乙ＡＢＣ

1　此ニ臥タルト　乙ＡＢＣ

1　乞匂（コッカイ）ニ候フト　底Ｃ（ＡＢＣの匂は変　ＡＣは包、Ｂは匂に近し）

2　凝屈テ　底国乙

2　義紹院　ＡＢＣ

2　思テ怒ニ着タル　★「思テ忽ニ着タル」乙ＡＢＣ「思フ忽ニ有タル」底国大　「「思フニ」の意。」

3　走テ　諸大

3　顔ニ　乙ＡＢＣ「頭ニ」底国大

4　取テ掻キ□テ　乙ＡＢＣ「取リ掻キ□テ」底国大

5　何ニ為ルソト　乙ＡＢＣ（Ｂのソは変）「何為ルゾト」底国大（底のソは変　リに近し）

5　施スナラハ　ＡＢＣ

5　而ルヲ　★「而ルキ」Ｂ「而ルニ」乙ＡＣ「而ヲ」底国大

6　打懸ケ施スハ　ＡＢ
6　可受ツト　ＡＢ「可受ソト」Ｃ「可受ト」乙「可受キト」底国大
6　失ヌ　諸
7　在ニコソ有ケレト思　乙ＡＢＣ「在マシケル有ケレト思」底国大（レの下かフニ　な一字分空白）
8　隠々　ＡＢＣ
8　甲斐无シ　乙ＡＢＣ
9　馬引ヘテ　ＡＢＣ
9　歩ミ行テソ　乙ＡＢＣ「歩ニテゾ行テ」底国大
11　然ハカリ　乙ＡＢＣ
11　智者也ト　乙ＡＢＣ
11　何況ヤ　乙ＡＢＣ（Ａの況は口偏）

巻二十第四十一話

二〇九15　依正直　乙ＡＢＣ
16　四十一代　持統天皇　「持統天皇」諸（彦底ＡＢの統は変　旁を宛に作る）「四十　一代持統天皇」乙
17　心ニ　乙ＡＢＣ「各ニ」底国大
「古本かく作る。心ザシとよむ「格」（名義抄）の省文としても、「右」（字類抄、コの人事）の譌としても、かくよめよう。」
17　明也　乙ＡＢＣ

二一〇1　シカルニ依テ　ＡＢＣ
5　有ヘシト　乙ＡＢＣ
5　然レトモ　諸（底のレはハの上に重書せしもの）
6　然ハ　乙ＡＢＣ大「然メ」国「然ソ」底「流布本により訂。」
7　不限リ　「不限シ」大
8　旱魃　流布本「旱颰」大
8　百姓ノ　乙ＡＢＣ「百性ノ」底国大
9　施ニ依テ　乙ＡＢＣ
9　此ニ依テ　乙ＡＢＣ
9　感ヲ垂ル　乙ＡＢＣ
10　雨降キ　乙ＡＢＣ
11　守リヲ加ル　ＡＢＣ
12　心不可仕フ　乙ＡＢＣ「心ノ不可仕ズ」底国大「このノはヲの意。」

巻二十第四十二話
二一〇1　宇陁郡ニ　「宇陀郡ニ」乙ＡＢＣ大「宇沱陀郡ニ」底国（沱みせけち）
2　子共養ニ　ＡＢＣ「子共養フニ」乙「子共ヲ養」底国大
3　身ヲ浄メ　乙ＡＢＣ（乙ＡＢＣはシテ）
3　居タ時ハ　乙ＡＢＣ

7　菜ヲ抹テ　「菜ヲ採テ」乙ＡＢＣ（乙Ｂは采を宋の如く作る）「菜ヲ搽テ」底国大　「採」に草冠を増画したもの。

7　者ハ　諸（底のハは変　ワの古体の如く作る）

7　佛法ヲ不法ヲ　乙ＡＢ

7　服薬仙ト云ケリ　諸大（底国の服は変　旁は艮　ケリをフナルヘシと訂するも採らず）

8　女也ト云ヘト　Ｂ

8　如此シ　乙ＡＢＣ

9　凶害ヲ　諸大

9　可離ルキ也トナム　Ｂ

巻二十第四十三話

二　六十代　朱雀院御代　乙

一　13　十一月　乙ＡＢＣ「月」底国大

13　大将ノ皇ヲ　乙ＡＢＣ

13　奉ル　乙ＡＢＣ

14　左右近ノ　諸大

15　其時ノ　乙ＡＢＣ

15　右大将ニテハ　乙ＡＢＣ「右大将ハ」底国大

16　人ノ御ケル　乙ＢＣ

16　山階寺ナトノ　乙ＡＣ「山階寺ナトソ」Ｂ「山階寺ナド」底国大
17　法蔵僧都ハ　乙ＡＢＣ
二一二2　不審サニ　乙ＡＢＣ
2　参ニケリ　乙ＡＢＣ「参ケリ」底国大
5　不審ニ思給テ　乙ＡＢＣ
5　参候ツル也　諸（底国の也は小字　行末にて也（ツル）と書けり）
6　吉カラムト　★「吉カフムト」Ｂ「吉カラント」乙ＡＣ「吉カラメト」底国大（底のメは重書して訂せしもの）
6　喜シ　乙ＡＢＣ「喜キシ」底国大
「古本かく作るは、「喜キ」と「喜シ」との混淆か。」
7　勘へ申シタリ　乙ＡＢＣ
8　悪カリナム　乙ＡＢＣ
8　若シ　諸（底は変　草冠をソに作る）
8　座ス　大「坐ス」ＡＣ
9　死ナムニ　乙ＡＢＣ
10　此ヲ聞テ　乙ＡＢＣ
11　捨テ　乙ＡＢＣ
11　加護シ給ヒナムト　乙ＡＢＣ（ＡＣのムはン）「如護シ給ヒナム」底国（加歟と朱傍）「加護シ給ヒナム」大
「流布本により訂。」

12　御ケリ　　乙B
13　在ラムトナム　　乙ＡＢＣ（ＡＣのムはン）
13　只人ハ　　乙ＡＢＣ

巻二十第四十四話

二一二16　従我門出　　諸（底は出の右肩にニの如きものあり）
二一三1　微妙カリケルナム　　諸大
3　西ノ京ノ家ニ　　乙ＡＢＣ「西ノ京ノ蒙ニ」底国大
「古本かく作るは、「家」の譌か。」
6　然リトテ　　乙ＡＢＣ
6　可出キニ侍ルト　　乙B「可出ニ侍ルト」国ＡＣ「可出ニ侍ツト」底大
7　恒ヲ　　底B
11　宣ヒソ　　乙ＡＢＣ
12　糸借ケレハ　　諸大「糸借ケレハ」底
「底本「借」に作れるを、諸本により訂。」
12　行タリケル　　ＡＢＣ
13　可将出キ門ノ　　乙B「可将出門ノ」ＡＣ「可将出テ門ノ」底国大
14　云ツレハ　　乙ＡＣ「云ツルノ」B「云」底国大（云の右下にツルハと傍書）
14　思ヘルニ依テ　　乙ＡＢＣ「思ニ依」底国大（ニに底はヒツルニと傍書）
14　壊テ　　乙ＡＢＣ「懐テ」底国大

14　将出セト　「懐」は「壊」の譌。流布本正字。」
14　云テ　乙ＡＢＣ
15　希有ノ事ヲモ　乙「云フ」古本「云」流布本
15　宣ヒケル人カナ　乙ＡＢＣ
15　析テ　乙ＡＢＣ大「宣ヒキル人カナ」底国
15　捨ケル　「流布本により訂。」
16　出ヌ人ヤ　Ｂ
16　イト奇異キ　乙ＡＢ
17　口々ニ　乙Ａ
二一四
1　僻事ヲ云ヒ合ヒツ　乙ＡＢＣ「糸奇異キ」国「糸弃異キ」底大
1　我カセムニ任テ　乙ＡＢＣ（乙ＡＢＣはゝ）
2　世不劣シ　乙ＡＢＣ
2　祖ニ　乙ＡＢＣ（ＡＣのムはン）
2　□キ者　諸（底国は世の右下にモ歟と傍書、Ｂの劣は変）
3　不為ル物ノ　乙ＡＣ
3　身不顧リ　大　ＡＣをのぞき諸本欠字。
4　人トハ云ソ　乙ＡＢ「不為ル物ニ」Ｃ「不為ヌ物ノ」底国大（ヌは変　シテの合字に近し）
4　天道モソレヲ　Ａ
乙ＡＣ
乙ＡＣ

4　時ノ　諸大
5　事ナ云ソト　乙BC
5　泣者共ヲ　乙ABC
7　讃メ貴ケリ　乙ABC「讃メ貴キ」底国大
7　難有ク　乙B
8　廣大也　底国（ケル心也と補入）
8　彼入道ノ身ニ　乙ABC
8　死ニケリ　乙ABC「死ニケリル」底国大
9　福力ニテ　乙BC
9　人ハ人ノ中ニ　乙ABC
10　此レヲ見聞ク　乙B

巻二十第四十五話

二一四14　学生ニテ　乙ABC（乙ABCは學）「學生ニシテ」底国大
15　吉事ヲ　乙ABC
15　篁ハ心中ニ　乙ABC
二一五1　此ヲ見テ此ハ何ナル　乙ABC
2　恠ク思ヘテ　乙ABC
3　直ニメ　乙ABC（乙ABCはシテ）
3　吉事者也　乙ABC

3　免シ給ラム　乙ＡＢ（乙のムはン）
5　思テ程ニ活レリ　Ｂ
6　暫ク止テ　ＡＢＣ
9　日来モ　乙ＢＣ
9　何タル事ソト　乙ＡＢＣ（Ｂのタは変）
10　御□ノ　諸大
10　此事人ニ不被仰弥ヨ恐テ不可被仰　乙ＡＣ「此事ノミ不被仰弥コ恐ヲ不可報仰」Ｂ「此ノ亙事弥ヨ恐テ人ニ不可被仰〻被」底国大（此ノ事まで補入傍書）「古本かく作るが、「弥ヨ恐テ」は、下文の同一句が竄入した為の衍か。流布本は、この上に更に「人ニ不被仰」を追加する。古本の衍「〻被」を、流布本は削る。」
11　不知ル事也　乙Ｂ
12　非リケリ　乙ＡＢＣ
12　人ノ為ニ　乙ＡＢＣ
14　恐怖ケリト　乙ＡＢＣ（Ｂの怖は変）

巻二十第四十六話

二一六3　□云人　諸本欠字。「□云フ人」大
3　吉ク　乙ＡＢＣ
4　平カニ〆　乙ＡＢ（乙ＡＢはシテ）
4　田畠　諸（底の畠は変　上部を田に作る）

5　来リ集テ　乙ＡＢＣ（Ｂの来は変）
5　思山ヲ不嫌　乙ＡＢＣ（Ｂの岡は変）「岡山ヲモ不嫌シテ」底国大
5　極テ　諸大
6　洹並ヒ无シ　ＡＢ（ＡＢは并）
7　□ト　諸大
7　佛神ノ　諸大
8　都ニ　乙ＡＢＣ「郡〻ニ」底国大
8　巡テ　乙ＡＢＣ
9　郡ニ不被知〆　乙ＡＣ（乙ＡＣはシテ）
9　猿籠ヲ　「旅籠ヲ」諸（旅は異体の変　彦底国ＡＣは𢍰変　旁は底は哀　彦ＡＢＣは表の如く作る）
9　郡ニ入ニハ　乙ＡＢＣ（Ｂの入は変）
10　引出物ナト　乙ＡＢＣ
10　然　諸大
10　其レハ　乙ＡＢＣ
11　我カ住ニハ　ＡＢＣ
11　可賢ニ　乙ＡＢＣ
11　便ヲ不得〆　乙ＡＢＣ（乙ＡＢＣはシテ）「使ヲ不得シフ」底国（フにテ歟と朱傍）「使ヲ不得シテ」大
12　可成ト　乙ＡＢＣ

12　云ヒ廻ラカシタレハ　乙ＡＢＣ（Ｂのラは変）「云ヒ廻ラカシ」底国大
12　国人共此ヲ聞テ　乙ＡＢＣ（乙ＡＢＣは國）
12　手ヲ作テ　乙ＡＢＣ「手ヲ作ニ」底国大（手は変　午に近し　手と傍書）「諸本かく作るが、「手ヲ抃テ」の譌か。」
12　喜テ喜シキマヽニ　乙Ｂ「喜テ喜キマヽニ」ＡＣ「喜テ」底国大（テの下に喜ニを補入）
12　各身　諸大「各自」Ｃ
14　如此ノ　諸大
14　郡ニ　乙ＡＢＣ
14　奥ノ方ニ　ＡＣ
15　彼レハ何ソト　乙ＡＢＣ「彼レヲ何ニ」底国大（ニの下かな一字分位空白）
16　渚ニ　乙ＡＣ
17　開テ見レハ　乙ＡＢＣ「開ヲ見レバ」底国大

二一七
1　組タル　乙ＡＢＣ「但タル」底国大　「但」は「組」の譌。」
1　其レニ糸ヲ以テ　乙ＡＢＣ「其糸ヲ以テ」底国大
「流布本に従って、補読。」

1　結タリ　乙ＡＢＣ「供タリ」底国大
2　重子ツ　★「重ネツ」諸（底のツは重書して訂せしもの）「重ヲ」国
3　寄来タルヘシ　ＡＢＣ
5　三腰ノ　乙ＡＢＣ
5　直三千　乙ＡＢＣ「直ハ三千石」底国大

6　丸鞆ノ直ハ　　乙ＡＢＣ

6　他ニ非ス約三字分欠　　乙ＡＢＣ（Ｃの非はアラ）「他ニ作ス□」底国大（行末まで約二十字分空白）「攷証、一本により「国ノ内ノ」と補。」

7　崇メ　　乙ＡＢＣ「榮メ」底国大

7　国ヲ吉ク　　乙ＡＢＣ

7　民ヲモ冨シ　　乙ＡＢＣ

7　冨テ不約三字分欠　　乙ＡＢＣ「冨テ□」底国大（行末まで約十字分空白）「攷証、一本により「亦此思ヒ」と補。」

8　財ヲモ　　乙ＡＢＣ

8　心ノ直弥ヨ　　「心ノ直□弥ヨ」底国大（行末まで約十字分空白）「攷証、一本により「キガ至セル所也。其ノ後ハ」と補。」

9　神ヲ崇メテソ　　乙ＡＢＣ（Ｂのテソは変）「神ヲ崇メ□」底国大（行末まで約十一字分空白）攷証、一本により「人ニ情ヲ当リ、民ヲ哀レムデゾ」と補。

9　吉ク□傳ヘタリトヤ　大「攷証、一本により「仕リ、道理ヲ可政キ也トナム語リ」と補。」

おわりに

『今昔物語』巻二十は、古態本として参照することができるのは、実践女子大本、國學院大本の二本のみであるが、本文の異同を見ると、巻十三で見受けられた傾向と同様に、彦根本と実践女子大本、國學院大本とは一致する箇所が多くないという結果となり、一方、流布本系諸本（内閣文庫本ＡＢＣ、東大本乙）とは表記のほとんどが一致するという

結果が得られた。また、これまでの巻において、内閣文庫本Bの表現は彦根城博物館本の表現と一致する箇所が多く、空白などの形式[18]も同様の傾向にあったが、巻二十の場合もB本が写し損ねている箇所は多いものの、彦根本との一致度は高く、B本が彦根本を引き写しているのは間違いないだろうと思われる。

本巻の分析で明らかになったのは、巻十九において指摘した、古態本における捨て仮名や送り仮名などが流布本では、異なる形に変化する傾向にあり、それが流布本系と古態本系の表現を分けるメルクマールになっているということがより明確な形で見られたということに加えて、明らかな漢字の間違いが流布本においては修正されているということである（ただし、第二話の「天狗」の「狗」の漢字が古態本では「宮」であったことは、研究上、必ずしも間違いとはいえず、さかしらに流布本が漢字を変えてしまっている可能性もあることは注意しておきたいことである）。[19]

以下、幾つか例を挙げておく。「肺」→「怖」（第一話）、「等」→「童」（第一話）、「非ザナリ」→「非サリ」（第二話）、「而ニル」→「而ルニ」（第三話）、「可亦キ」→「可然キ」（第六話）、「見奉ラムヒテ」→「見奉ラムトテ」（第七話）、「而ル程間」→「而ル程ニ」（第七話）、「語ト傳ルトヤ」→「語リ傳ヘタルトヤ」（第七話）、「哀ツレカ」→「哀レカリ」（第十一話）、「今ハ限タト」→「今ハ限リト」（第十一話）、「攝國」→「攝津國」（第十五話）、「依テ也思テ」→「依テ也ト思テ」（第十五話）、「不當ズト宣テ又」（捨て仮名）→「不當ト宣フ又」（第十六話）、「破打迫ル」→「被打迫ル」（第十六話）、「師」→「物」（第二六話）、「計」→「許」（第三三話）、「夢」→「魚」（第三四話）、「不被取ネバ」→「取ラレネハ」（第三四話）、「可行ヲ事ヲ」→「可行キ事ヲ」（第三五話）、「忠」→「志」（第三五話）、「供養」→「供奉」（第三五話）、「事ヲ縁モ」→「事ノ縁モ」（第三五話）、「嫌シク」→「疑シク」（第三九話）、「如護」→「加護」（第四三話）、「蒙」→「家」（第四四話）、「借」→「惜」（第四四話）、「宣ヒキル人カナ」→「宣ヒケル人カナ」（第四四話）、「死ニケリル」→「死ニケリ」（第四四話）、「但タル」→「組タル」（第四六話）。

なお、第二十七話には、古態本の「頭ヅ」の捨て仮名「ヅ」を、流布本において「頭ヲ」のように助詞に変えている例もあり、書き下す時の捨て仮名が流布本では理解されずに別の意味に曲解されて校訂される場合もあることは諸本間

の異動において注意されるべき事柄であろう。

その他、古態本の□（空白）は、流布本では削除しても意味が通る場合や容易に校訂できるような場合は削除されている。巻二十第一話では、古態本「暫許有テハ□中ニ」が流布本では「暫許有テハ中ニ」となっている。同様に空白を落とした例は、第九話「極ク□マレク」が「極クマレク」に、第十一話「□鶏」が「鶏」に見られる。また、第七話の古態本「参□ルニ」が内閣文庫本Aでは「参スルニ」、内閣文庫本Cでは「参ラスルニ」、内閣文庫本B、彦根本では「参ルニ」にも見られる。ここからは、空白の部分を内閣文庫本A，Cでは補おうとし、彦根本と内閣文庫本Bでは、削除したことがわかる。このような校訂の仕方に違いはみられるものの、基本的に流布本系統では、空白に校訂を加えようとする意識が見られる。同様に第七話の古態本の「女房ナト□ケレハ」の空白部分は、流布本では、「聞」の漢字をあてて、空白を削除している。一方、固有名詞が入るような場合や容易に推測できないものについては、そのまま空白となっている。第三三話では、諸本全て「□ト云」として空白部分があり、第三五話では、「美濃守□」、第四六話では、「□云（フ）人」のように、固有名詞の部分は諸本すべて空いている。また、第三六話では、古態本「□ラ」も流布本「□テ」も空白のままとなっており、第四六話では三か所の欠字部分の分量が多く校訂が難しかったのか、そのままどの箇所も欠字となっている。

このように、諸本間において、実践女子大本、國學院大本から流布本系へと変化の様相を見てとることができる。巻二十では、東大本甲、東大本乙が残っていないこともあってか、実践女子大本、國學院大本のような古態本と流布本系との間には隔絶の感がある。実践女子大本、國學院大本が意味の通らない漢字や捨て仮名をそのまま写しているのに対して、流布本系では全体として意味の通る漢字をあてており、流布本系が写した本が正しい漢字を使っていたか、あるいは、『日本霊異記』のような出典を参照したのかは不明だが、流布本が読める本文を目指して校訂していることは疑いない。但し、第三十二話では、彦根本、内閣文庫B本が古態本と同じ「幼キ子ヲ」と記し、その他の流布本は、「幼キ子ヲ」と記していて、彦根本が古態本に拠ったと思われる表記をもつことも確認される。彦根本の時折、揺れるその

位相については、巻ごとの緻密な分析が今後さらに必要と思われる。

ひき続き、他の巻においても、そうした漢字、仮名等の表記の意識の在り方についての検討を加えていき、彦根城博物館本の諸本における位置づけを明らかとしたい。

注

(1) 中根「未紹介本『今昔物語』(彦根博物館所蔵)についての一考察」(『愛知県立大学説林』53号　二〇〇五年三月)

(2) 中根「彦根城博物館所蔵『今昔物語』巻一の本文の位置づけ」(「愛知県立大学文学部論集」54号　二〇〇六年三月)

(3) 中根「彦根城博物館所蔵『今昔物語』巻二の本文の位置づけ」(「愛知県立大学文学部論集」55号　二〇〇七年三月)

(4) 中根「彦根城博物館所蔵『今昔物語』巻五の本文の位置づけ」(「愛知県立大学日本文化学部論集」1号　二〇一〇年三月)、中根「彦根城博物館所蔵『今昔物語』巻七の本文の位置づけ」(「愛知県立大学日本文化学部論集」3号　二〇一二年三月)、中根「彦根城博物館所蔵『今昔物語』巻九の本文の位置づけ」(「愛知県立大学日本文化学部論集」4号　二〇一三年三月)

(5) 中根「彦根城博物館所蔵『今昔物語』巻三の本文の位置づけ」(「愛知県立大学文学部論集」56号　二〇〇八年三月)、中根「彦根城博物館所蔵『今昔物語』巻六の本文の位置づけ」(「愛知県立大学日本文化学部論集」2号　二〇一一年三月)、中根「彦根城博物館所蔵『今昔物語』巻十の本文の位置づけ」(「愛知県立大学日本文化学部論集」5号　二〇一四年三月)

(6) 中根「彦根城博物館所蔵『今昔物語』巻四の本文の位置づけ」(「愛知県立大学文学部論集」57号　二〇〇九年三月)

(7) 中根「彦根城博物館所蔵『今昔物語』巻十一の本文の位置づけ」(「愛知県立大学日本文化学部論集」6号　二〇一五年三月)

(8) 中根「彦根城博物館所蔵『今昔物語』巻十二の本文の位置づけ」(「愛知県立大学日本文化学部論集」7号　二〇一六年三月)

(9) 中根「彦根城博物館所蔵『今昔物語』巻十三の本文の位置づけ」(「愛知県立大学日本文化学部論集」8号　二〇一七年三月)

(10) 中根「彦根城博物館所蔵『今昔物語』巻十四の本文の位置づけ」(「愛知県立大学日本文化学部論集」9号　二〇一八年三月)

(11) 中根「彦根城博物館所蔵『今昔物語』巻十五の本文の位置づけ」(「愛知県立大学日本文化学部論集」10号　二〇一九年三月)

(12) 中根「彦根城博物館所蔵『今昔物語』巻十六の本文の位置づけ」(「愛知県立大学日本文化学部論集」11号　二〇二〇年三月)

(13) 中根「彦根城博物館所蔵『今昔物語』巻十七の本文の位置づけ」(「愛知県立大学日本文化学部論集」12号　二〇二一年三月)

（14）（11）に同じ。
（15）（12）に同じ。
（16）（9）に同じ。
（17）中根「彦根城博物館所蔵『今昔物語』巻十九の本文の位置づけ」（「愛知県立大学日本文化学部論集」13号　二〇二一年三月）
（18）（1）に同じ。
（19）（17）に同じ。